

【論文】

仙台藩儒・大槻磐溪によるペリー来航前後の情報収集活動とその活用

嶋  
村  
元  
宏

# 仙台藩儒・大槻磐渓によるペリー来航前後の情報収集活動とその活用

嶋 村 元 宏

## はじめに

**【キーワード】**  
 儒学者 昌平坂学問所（昌平櫻） ネットワーク  
 『金海奇観』「鎖国」と開国 別段風説書 受取始末

**【要旨】**  
 仙台藩儒者・大槻磐渓を対象とし、ペリー来航前後の情報収集活動の実態がいかなるものであったのか、さらにその収集した情報がいかに活用されたのかを明らかにすることが、本稿の目的である。

まず第二章では、磐渓が執筆した対外意見書から、磐渓がいかなる著作物を利用したのかを確認し、磐渓のもう海外知識が、対外意見書を執筆するにあたりいかに活用されたのかを確認した。また、同じく対外意見書を執筆するにあたり根拠とした、本来幕府によって厳重に管理されしかるべき対外関係文書入手している実状を確認し、磐渓の情報収集能力について明らかにした。

次に第二章では、これまで活用がみられてこなかった『米夷紀事』を根本史料として利用し、そこに記述された内容から、浦賀奉行所与力中島三郎助、香山英左衛門、応接掛・林大学頭復齊、松崎満太郎、上田藩士・恒川才八、中津藩士、長州藩士等から情報を得ており、また儒学者・宮内彦太郎と共に調査をしていることが判明した。また、磐渓に同行した塾生が横手信太郎であったこと、ならばに絵師が辻探冒であったこと等、人的情報源について明らかとなつた。さらに入手した情報を他の情報と照合するなどの活用がおこなわれていたことも判明した。

仙台藩医にして蘭学者の大槻玄沢の次男として江戸木挽町に享和元年に生まれた大槻磐渓に関する従来の研究の多くは、磐渓が儒学者、漢学

者であつたことから、日本近世思想史<sup>(7)</sup>あるいは文人としての作品や業績にかかるもの<sup>(8)</sup>、ならびに文人ネットワークについて焦点をあてたものであつた。その文人ネットワーク研究の一つとして、工藤宜氏は、磐渓が遺した『塵積成山（積塵成山）』と題する貼り交ぜ帳一一冊を紹介している<sup>(9)</sup>。そこに含まれるペリー来航時に自らが描いた絵図面等についてふれてはいるが、本稿が明らかにしようとする情報収集活動全般について考察したものではない。

そこで本稿では、まず、磐渓が著した対外問題に関する意見書・上申書類を分析し、いかなる著作物から海外知識を得ていたのかを確認するとともに、ペリー来航前後に磐渓が入手した対外関係文書について、その入手時期を中心に検討する。つぎに、嘉永七年の第二回ペリー来航時における情報収集活動について、その情報源、特に人的情報源も含めより具体的に明らかにする。また、あわせて、収集された情報がどのように活用されていたのかを、史料にもとづき実証していくことにしたい。

## 一 海外知識と対外関係文書の入手

### （1）海外知識

大槻磐渓が対外関係意見書を執筆するさいに参考とした著作物を確認することで、封建的・非開明的とされる儒学者のひとりであつた大槻磐渓がいかなる海外知識を有していたかについてまず明らかにしていきたい。

磐渓が著した対外意見書として著名なものは、以下の五点が挙げられる。すなわち、イギリス軍艦マリナー号来航を契機に嘉永二年に著された、

① 「献芹微衷」、

ならびに、嘉永六年にペリー・アメリカ使節ならびにチャーチン・ロシア使節の来航にさいして相次いで上申された、

② 「六月八日仙台藩士大槻平次<sub>清上書</sub> 儒役林大学頭<sub>健</sub>へ 米国使節の渡来に就て<sup>(12)</sup>」、

③ 「八月十一日仙台藩士大槻平次<sub>清上書</sub> 若年寄遠藤但馬守<sub>統</sub>へ 米国国書に就て<sup>(13)</sup>」、

④ 「九月二十日仙台藩士大槻平次<sub>清上書</sub> 勘定奉行川路左衛門尉<sub>聖</sub>へ 露船の処置に就て<sup>(14)</sup>」、

⑤ 「十月二十日仙台藩士大槻平次<sub>清上書</sub> 老中阿部伊勢守正弘へ 露船の処置に就て<sup>(15)</sup>」、

である<sup>(16)</sup>。

この五種類の対外関係意見書のうち、はじめての対外関係意見書で、老中・阿部正弘から海防についての上申を求められ、嘉永二年十月三日に提出されたとされる①『献芹微衷』からみておきたい。

『献芹微衷』については、磐渓の子・大槻如電等は、磐渓が「国事に公然と嘴を容れられ、即ち開国論を唱へられた皮きりである。海堡篇・陸戦篇・水戦篇・隣好編上・下の都合五篇であつて、漢文でかゝれた。その中で隣好篇の上が開国論の主眼である<sup>(18)</sup>」と、五編からなり、ロシアとの通交を提案していることから、ペリー来航以前の早い時期に書かれた開国論として評価している<sup>(19)</sup>。磐渓がこれを執筆するにあたり、具体的に何を参照したかについての記述はなく、ロシアとの通信・通商について提言がみられる「隣好篇 上・下」においても、ラクスマンおよびレザーノフ両使節の来航にかかる一般的な記述がなされているだけであり、参照した文献については触れてはいない。

しかし、これら両ロシア使節については、父である大槻玄沢をはじめ

とした蘭学者による海外事情書から得た情報にもとづいているものと思われる。嘉永六年一〇月にブチャーチン・ロシア使節の対応について老中・阿部正弘へ提出した、次のような書き出しから始まる上申書（⑤）により判明する。

私儀昔年環海異聞を編著仕候大槻玄沢と申者次男ニ御座候、魯西亞國之義ハ、弱年之頃々、膝下之談に時々承及、其内ニも、文化年中、使節レサノツト<sup>(江)</sup>論文御渡シノ當日、大通詞何某其段を内々使節<sup>(江)</sup>申通し候節、レサノツトは常ニ変らず、神色自若として申候は、雨降て地固まとるとやら、御断になるも、又一ツ之幸なり、此事の成就するハ、我等かくなりたる末之事に迫、両足ニ而地下を踏鳴らし為見候由など、今以耳に留り居り候。<sup>(20)</sup>

すなわち、幼いころより、ロシアについては、父・大槻玄沢から聞かされており、特にオランダ大通詞「何某」、すなわち石橋助左衛門<sup>(21)</sup>がレザーノフに対して内々に通商拒否の旨を伝えたさいには、今回ロシアにとつて残念な結果ではあつたが、これが将来の礎になるとして潔く受け入れたという話を鮮明に記憶しているというのである。このようなロシアの寛容さについては、イギリスとの比較のなかで、③でも明確に述べられている。この時の話が磐溪に与えた影響がいかに強かつたかを知ることができる。

さらに、その一文に続けて、「其後此国ニ関係仕候西史ハ、追々涉獵仕殊更奉使日本紀行遭厄日本紀事等ハ、熟覽も仕、彼是考合候<sup>(22)</sup>」とあり、ロシアに關する著作について探し求めるとともに、特に『奉使日本紀行』と『遭厄日本紀事』等は、熟覧したと自ら記述している。

これらの著作が大槻家に遺されていたことは息子の大槻如電がまとめた『磐溪追遠展覧会 大槻文庫書目』（私家版、明治四一年）から判明した『磐溪追遠展覧会 大槻文庫書目』（私家版、明治四一年）から判明

する。これは、当時東京の大槻家が所蔵していた<sup>(24)</sup>著訳書類を「大槻磐溪三十年追遠展覧会」に出品したさいの目録である。前書きによれば、「大槻文庫所蔵明治以前西洋学術に関する著訳書類」を、「文学 六十一種」、「史学 七十九種」、「医学 百九種」、「理学 七十二種」、「兵学 百九種」、「法学 八種」、「工学 九種」、「欧書 十種」、「書画 二十四種」、「刻板 三種」に分類し、展示したようである。そのうちロシアに関する著作は、「史学」に分類されており、【表】大槻文庫「史学」関連文献に示したとおり七九点確認できる。そのうちロシアに関する著作は、前野良沢『魯西亞本紀大統略記』（寛政五年）、志筑忠次郎『同附録』（寛政七年）、桂川甫周『魯西亞志』（寛政五年）、山村才助『魯西亞誌』（文化三年）といった、ラクスマン来航直後に輸入書籍をもとに著された著作である。それに加え、幕府の通商拒否に対する報復として始まった、いわゆる「文化露寇」に関する大槻玄沢『北辺探事』（文化三年）や、ロシアから帰国した漂流民による聞き書きをまとめた桂川甫周『北槎聞略』（寛政五年）、大槻玄沢『環海異聞』（文化四年）等を所持していたことがうかがわれる。

具体的な書名が挙げられ、磐溪が熟覧したとする『奉使日本紀行』と『遭厄日本紀事』については、文化元年のレザーノフ・ロシア使節に関連する翻訳書である。いずれもよく知られた著作であるので、詳しい解説は省くが、前者は文化元年に長崎へ来航したレザーノフ・ロシア使節も参加した、ロシア海軍大尉クルーゼンシュテルンの世界周航団の公式記録を、幕府天文方・青地盈（林宗）が翻訳し、同・高橋景保が校訂したもので、後者は、「文化露寇」に関連して、松前藩に拿捕され、一八一九年にオランダ通詞・馬場佐十郎が翻訳し、高橋景保が校訂したもの

【表】大槻文庫「史学」関連文献

No.	目録番号	書名	員数	成立年	著者	摘要
1	62	魯西亞本紀大統略記	写 1	寛政5年	前野良沢	家蔵二本小者係山村才助自筆
2	63	同附錄	写 1	寛政7年	志筑忠次郎	
3	64	魯西亞志	写 1	寛政5年	桂川甫周	
4	65	魯西亞誌	写 7	文化3年	山村才助	
5	66	印度誌	写 1	文化4年	山村才助	原書二冊家蔵欠其首卷
6	67	英吉利國紀略	1			年号姓名不詳 例言に隽の一字あり足立長隽か
7	68	合衆国小誌	2	安政元年	小閔高彦	
8	69	西洋列國史略	写 1	文化5年	佐藤百祐	
9	70	西洋小史	写 1	嘉永元年	長山鴻園	
10	71	蕃史	2	嘉永4年	斎藤竹堂	
11	72	外蕃通表	写 1	嘉永6年	大槻恒輔	
12	73	遠西紀略	2	安政2年	大槻恒輔	
13	74	那波列翁略伝			小閔三栄	
14	75	卜那把廬の紀略	1		大槻恒輔	
15	76	異国往来記	2	貞享3年	遠山信武	
16	77	華夷通商考	2	元禄8年	西川如見	
17	78	増補華夷通商考	5	寛永5年	西川如見	前書は未定稿を濫に上木されしとて更に増訂して出版す
18	79	西洋紀聞	2	宝永7年	新井勘解由	
19	80	紅毛談	1	明和2年	後藤梨春	
20	81	万国山海経	5	天明3年	大江文坡	京都人号菊丘臥山人
21	82	紅毛雜話		天明7年	森島中良	
22	83	蘭説辨惑	2	天明8年	大槻玄沢	
23	84	西域物語	写 3	寛政10	本田魯鈍斎	越後人名利明称三郎右衛門江戸に住し算術を以て名あり
24	85	万国新話	5	寛政元年	森島中良	
25	86	西洋雜話	4	享和元年	山村才助	
26	87	大西要録	写 1	享和3年	山村才助	
27	88	新訳東西遊記	写 2		山村才助	
28	89	西洋商舶原始	写 1		山村才助	
29	90	和蘭通舶	2	文化2年	司馬江漢	
30	91	采覽異言	2	正徳3年	新井白石	
31	92	増訂采覽異言	13	享和2年	山村才助	
32	93	和蘭地図略説	写 1	明和8年	本木仁大夫	
33	94	輿地図名訛	1	安永6年	本木仁大夫	奥書に崎陽得之書写林子平とあり 安永は其書写せし時の年号なり
34	95	万国図説	写 2	天明6年	桂川甫周	
35	96	泰西輿地図説	17	寛政元年	朽木昌綱	
36	97	地球全図略説	1	寛政9年	司馬江漢	
37	98	輿地全図説	1	享和2年	稻垣子戩	明人原著其漢文を和訳せしもの
38	99	新字小識	2	文化13	猪俣昌永	亜墨利加地誌なり筑前安倍龍の著を読みし者訂正五冊嘉永中出版
39	100	輿地誌略	写 5	天保中	青地林宗	総説及魯意仏英四国亜細亜諸島印度都児格の地誌なり
40	101	坤輿図識	6	弘化3年	箕作省吾	正三冊補三冊
41	102	三才正蒙	3	嘉永3年	永井青崖	筑前人名則
42	103	八紘通誌	6	嘉永3年	箕作阮甫	
43	104	地学正宗	8	嘉永3年	杉田玄瑞	
44	105	万国図誌	写 1	文久2年	手塚律藏 佐波銀次郎	万国とあれど首巻一冊のみ

No.	目録番号	書名	員数	成立年	著者	摘要
45	106	地球万国全図	1	天明2年	長久保赤水	弘化元年再刻本あり
46	107	噶蘭新訳地球全図	1	寛政8年	橋本宗吉	
47	108	地球一覧図	1	天明3年	三橋釣客	釣客は題言にして愚山の印あり松本愚山か
48	109	銅板万国略図	1	文化8年	高橋景保 下津子助図	亜欧堂水田善吉彫
49	110	万国地球全図	1	天保9年	阿部棟斎	
50	111	新製輿地全図	1	弘化元年	箕作省吾	
51	112	地球万国方図	1	嘉永2年	翠堂彭	本姓名未詳上に湯陵とあれば湯島居住の人なるべし
52	113	亜西亞略図	1	慶応3年	陸軍所	西伯亜の地図なり書者は前田又次郎とあり
53	114	日本輿地路程全図	1	安永4年	長久保赤水	日本図に經緯度を施せしは此図を初とす刻成は七年なり栗山の題詞
54	115	実測日本全図	写 2	文化元年	伊能勘解由	大中小三図あり是其小図にて阿部勢州侯旧蔵明治初年文部にて出版
55	116	東海舟程全図	1	天保11	小野寺謙治	仙台領より江戸海に至る船路 小野寺風谷仙台儒員
56	117	三航蝦夷全図	写 14	年月不詳	松浦武四郎	
57	118	三国通覧	図 1 5	天明5年	林子平	
58	119	北地危言	1	寛政9年	大原小金吾	京都隱士曾松前侯の聘に応じ所懐を陳せしとぞ明治廿年活字出版
59	120	北辺探事	写 5	文化3年	大槻玄沢	文化二年北地に魯寇ありし時其国の事情を探りしもの
60	121	婆心秘稿	写 3	文化5年	大槻玄沢	是年長崎に英虜の変あり仍て其国の形勢を論したるもの
61	122	野作雜記訳説	写 6	文化6年	馬場佐十郎	野作は蝦夷の漢訳字
62	123	漂民問答	写 1	寛政5年	中川勘三郎 問 船頭光太夫答	
63	124	北槎聞略	写 13	寛政6年	桂川甫周	光太夫魯國に在る十余年其物語を筆記したるもの
64	125	環海異聞	写 8	文化4年	大槻玄沢	仙台領の漂民記事
65	126	統海外異聞	写 12	文政11	大槻玄沢	正編は仙川甫周所輯不藏
66	127	亜墨新話	写 5	弘化元年	前川文三	阿波藩士其國の漂民話説
67	128	遭厄日本紀事	写 16	文政8年	馬場佐十郎 杉田立卿 青地林宗	文化八年魯人兀老尹等漂着松前幽囚三年獲還其間日記也
68	129	彼理日本紀行	写 10	文久2年	手塚拙藏 工藤岩次	嘉永六年安政元年米国使節彼理來日本結通信其記行也
69	130	鎖国論	写 1	享和元年	志筑忠雄	元禄中蘭人ケンブル日本記事抄訳
70	131	蕃賊排擯訳説	写 1	文化5年	高橋景保	同上
71	132	切支丹來朝実録	写 1	寛永10年		
72	133	南蛮寺興廢記	1			
73	134	金城秘韻	写 2	文化9年	大槻玄沢	寛永中仙台藩士支倉常長が羅馬より将来せし書器の考証
74	135	岡本三右衛門筆記事	写 1			寛永末羅馬人來唱耶蘇囚之江戸獄改名岡本三右衛門即其記事也
75	136	蘭学重寶記	写 1	嘉永6年	加壽麻呂	一名和蘭年歴 著者不詳其本姓郷貫
76	137	洋学燕石紀	1	文政3年	川島元成	丹波人日本漢土西洋対照年表燕石は玉に似たる石にて愚人所寶とぞ
77	138	蘭学事始	1	文化12	杉田玄白	蘭書訳述の苦学を記して大槻玄沢に与へしもの 明治二年上木
78	139	西賓対晤	写 1	文化11	大槻玄沢	寛政六十享和二文化三七十一の六回蘭人來貢の時に學術質問筆記
79	140	府下蘭学者姓名		安政2年	勝麟太郎	蛮書調所翻訳用に取調たるもの 杉田箕作等縦て五十八名

※『磐溪追遠展覧会 大槻文庫書目』(私家版、明治41年) をもとに作成

である。

幕府へのレザーノフ・ロシア使節への対応、およびそれを契機として発生した「文化露寇」といった、一八世紀末から一九世紀初頭における国際的緊張関係を生み出したこれら二つの事件が、磐渓をしてロシアへの関心を高めたものといえよう。なお、②と④については、それぞれ実際に来航したアメリカとロシア使節への対応策であり、磐渓が強調していることは、他の磐渓が著した対外関係意見書との違いはみられない。

しかし、それらの対外関係意見書も含め、ペリー来航以前において磐渓は、蘭学者ならびに海外事情書から得た、ロシアを中心とする各国にかかるわる海外知識をもとに執筆していたのである。

## （2）対外関係文書

磐渓は、蘭学者が翻訳・執筆した海外事情書に加え、本来幕府により厳密に管理されていてしかるべき重要機密情報である、複数の対外関係文書を入手していた。これは嘉永六年六月三日、ペリー・アメリカ使節がはじめて浦賀へ来航したさい、藩命による異国船の動向についての探索を終え帰府した直後の六月八日に、林大学頭復齋へ提出した対外関係意見書（②）の記述から、具体的に知ることができる。

一、昨日帰宅仕候後、尚又浦賀表江罷越委細見分仕候者直話ニ承り候處、此度之異国船愈北垂墨利加ニ相違無御座候、……、使節之者持參之國書御受取ニ相成候上ならてハ、聴と相分り兼候得共、去ル子年和蘭人風説書を以申上候通、近海之内ニ一嶋を押借仕、石炭等差置度と申事ニも可有之、尤一昨年帰朝之土州漂流人万次郎咄しこも、日本近海捕鯨等之節、薪水等無差支様、東海之内一ヶ所貰請度由、米利幹人申聞候儀も有之由承り候得は、旁以右一條ニ相違も有之間敷哉と奉存候、<sup>（25）</sup>

ここにあるように、来航直後の探索では、来航した異国船の船籍について把握できないまま帰府していたが、その後浦賀からの新たな情報をよりほぼアメリカ船であることを確信したのである。それをふまえ、アメリカ大統領国書の内容を確認するまでは、アメリカ側の要求がいかなるものであるかは確証がないしながらも、一つには、日本における石炭貯蔵場所の確保であろうことを「去ル子年和蘭人風説書」の記載から推測している。

「和蘭人風説書」とは、一般的には、寛永一八年以降オランダから提出されるようになつた通例の「風説書」を指すが、「子年」、すなわち嘉永五年にもたらされた通例の「風説書」には、アメリカの使節派遣ならばに石炭貯蔵所の確保をはじめとするアメリカ側の要求に関する記載はない<sup>（26）</sup>。また、嘉永五年の「別段風説書」には、「日本湊の内都合宜所」（長崎訳）、あるいは「相應なる港」（江戸訳）に石炭貯蔵場所を求めてはいるが、「近海之内ニ一嶋を押借仕」とあるような、島嶼部を指定した記述はみられない<sup>（27）</sup>。島嶼部に石炭貯蔵場所を要求する旨記述されるのは、嘉永四年までオランダ商館長であったレフィスゾーンが、知人のアメリカ人パーマーから送られた対日方針に関する複数の書類をまとめ、帰国後の一八五一年（嘉永五年）に公刊した*Bladen over Japan*（『日本雑纂』）にみられる。その訳文には、

一、日本・亞墨利加両國ノ交接意ノ如ク整ヒ、唐國ニ亞墨利加蒸氣船通路ノ企、蝦夷ノ都府サンガル<sup>（名地）</sup>ノ海門ニ接ル松前及ビ對馬ノ屬嶋フコンフコンク<sup>（島名）</sup>ノ港ニ石炭場ヲ設ケ（後略）  
と記載されている。<sup>（28）</sup>

ペリー来航以前にあつて、アメリカが石炭貯蔵場所を日本の島嶼部に求めようという意図を持っていたことを示す記述は管見の限りこれだけ

であり、磐渓が参照した「去ル子年和蘭人風説書」とは、レフイスゾーの『日本雑纂』であつたということになる。

さらに、「一昨年帰朝之土州漂流人万次郎咄し」を根拠に、アメリカ側の要求内容について言及している。「土州漂流人万次郎」とは、天保一二年に漂流し、嘉永四年アメリカから帰国した中浜万次郎のことである。万次郎によるアメリカに関する口述書は、

- A 「琉球使番取調記録」（嘉永四年正月）、
- B 「琉球在番奉行取調記録」（嘉永四年二月）、
- C 「長崎奉行牧志摩守取調記録」（嘉永四年一月）、
- D 「土佐藩取調記録〔漂客談奇〕」（嘉永五年初冬）、
- E 「薩摩藩取調記録」（嘉永六年八月）、
- F 「江戸幕府取調記録」（嘉永六年一一月）

の六種類が知られている。<sup>(29)</sup>

このうち、EとFはこの対外意見書が上申された嘉永六年六月以降に成立したものである。したがって、磐渓が参照可能であつたのは、AからDまでの、薩摩藩により実質支配されていた琉球で、薩摩藩がおこなつた訊問に対する口述書（A・B）と、その後長崎へ回送され、長崎奉行牧志摩守取調記録によつておこなわれた訊問の口述書（C）、および土佐藩の吉田東洋がおこなつた尋問書（D）ということになる。具体的に何れの口述書を入手し得たのかは不明である。しかし、嘉永六年一一月、土佐藩の絵師・河田小龍が藩命によりあらためて聞き取りをおこない、それを『漂異紀略』全四冊としてまとめたものは広く一般へも流布したが、磐渓は本来一般には流布し得ないこのような機密情報にまでもアクセスできる立場にあつたということになる。

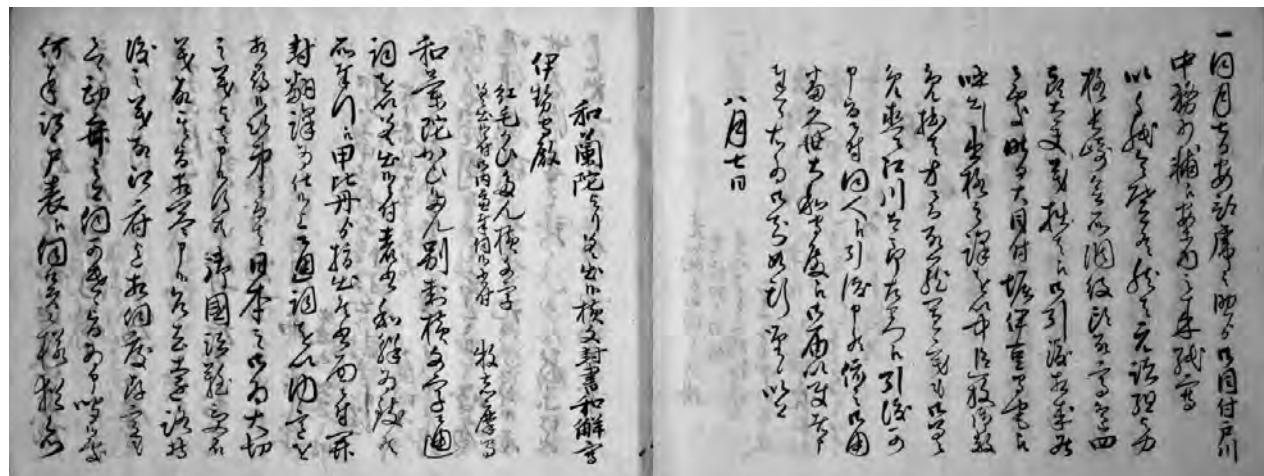
以上、対外意見書中に具体的に記載された対外関係書をみてきたが、

次に、大槻家に遺された、磐渓が収集したと思われる対外関係書をみておきたい。一般に『和蘭告密書御受取始末』（以下、『受取始末』）と称される史料である。

『受取始末』は、複数の公文書を一括した編纂文書の総称である。これは、嘉永五年六月五日に新任オランダ商館長・ドンケル・クルティウスが、通例の風説書ならびに別段風説書とともに持参した『バタヴィア（東インド）総督公文書』と『日蘭通商条約草案<sup>(30)</sup>』を提出する許可を求めたのに対し、これらの受取可否に関する長崎奉行から幕閣への問い合わせ、幕府内部での評議、方針決定、クルティウスへの通達ならびに、それらの補足説明等の付属文書といった、当時別個に成立した一連の関係文書よりなつていて、

このような手続きが必要となつたのは、新たにもたらされた二つの公文書は、別段風説書に記載されたいわゆるペリー来航予告情報に関連した文書であり、幕府としては入手すべき重要情報であつたにもかかわらず、幕府自らそれらを入手することを禁じていたからである。つまり、弘化二年のいわゆるオランダ国王の開国勅告への返答にあたり、朝鮮と琉球のように国書の交換をおこなえる通信関係にはないオランダからの公文書の受け取りを以後拒否することを通告していたため、この時点において、それらの公文書を受け取ることができなくなつていていたのである。そこで、それを受け取れるようにするための評議をおこない、その結果、別段風説書同様、返書を求めない一方的な文書であることを確認したうえで、提出を許可することに決したのである。<sup>(31)</sup> この一連の経緯にかかわる文書を一括したのが『受取始末』である。

この『受取始末』が一括文書として流布していたということは、嘉永七年の日米条約交渉にあたり幕府側全権首席であつた昌平坂学問所總

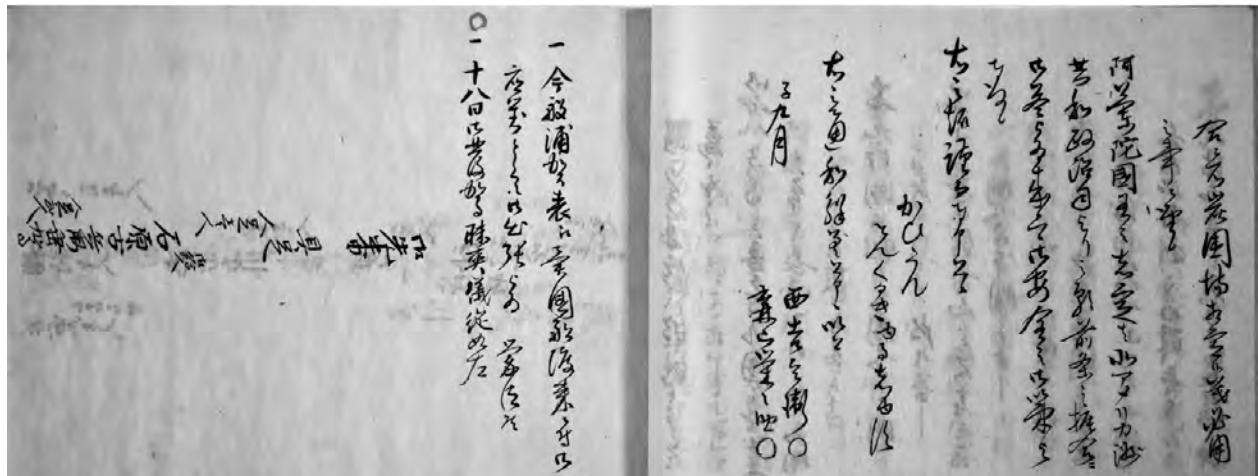


【写真 1-1】『竹田鼎の日記』（中嶋宏子氏所蔵）：『受取始末』冒頭

裁・林大学頭復齋の従者として、アメリカとの応接に参加した竹田鼎による日記<sup>33</sup>（以下、「竹田鼎の日記」）から判明する。『竹田鼎の日記』は、ペリー第一回来航の嘉永六年六月から書き始められており、ペリー来航に関して幕府が林家へおこなつた指令、現地からの注進状、上申書等が日付順で記載されている。「受取始末」は、「一、同月七日安部庸之助ら御目付戸川中務少輔<sup>江</sup>案内之來紙写」と題する八月七日付の書翰の写しに続けて改丁後書きはじめられている。この文書の後は嘉永七年正月に、応接掛として浦賀出張が林大学頭へ対して命じられたことに関連する記述である。

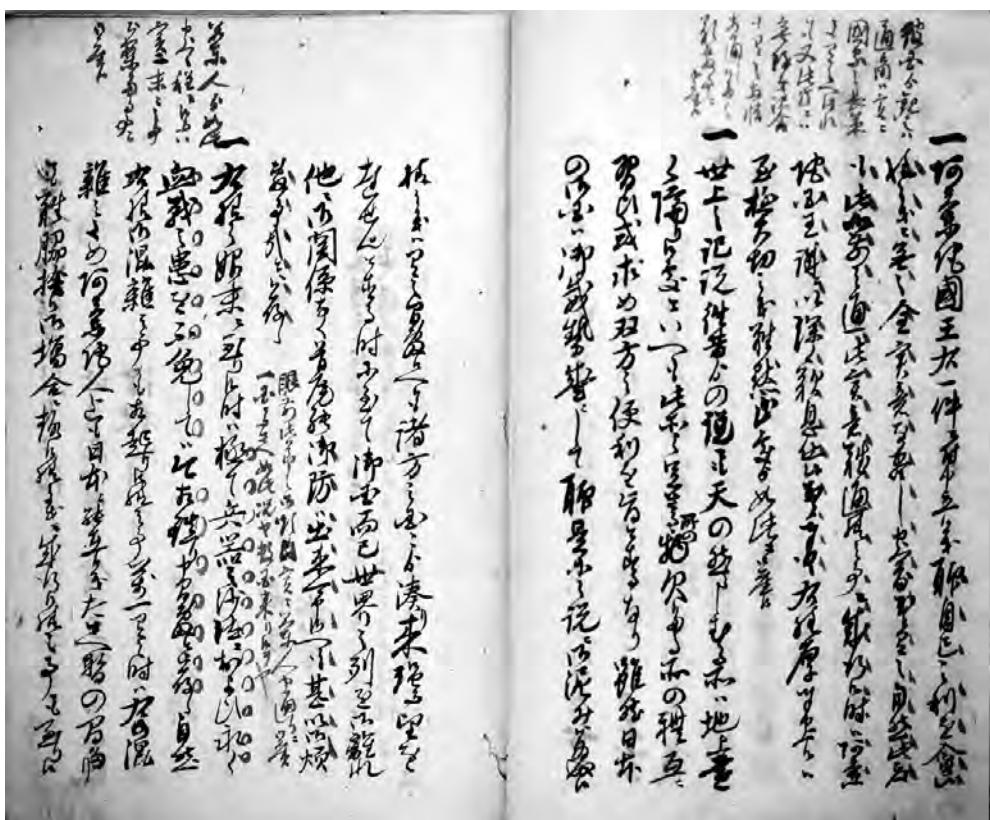
「受取始末」の前後において、紙質ならびに筆跡に変化はみられない（写真 1-1-2）。したがつて改丁されているとはいえ、「受取始末」の部分だけが後で差し込まれたとは考えづらく、竹田鼎は、第一回ペリー来航後の嘉永六年八月から嘉永七年正月までの間に「受取始末」を入手したと考えられる。なお、「竹田鼎の日記」では、この一連の文書を総称する表題は付されていない。したがつて、林家周辺にもたらされたさいは、とくに表題がない状態で流布していたと思われる<sup>34</sup>。

一方、磐溪による『受取始末』<sup>35</sup>は、「竹田鼎の日記」中の『受取始末』とは異なり、「和蘭告密書御請取始末<sup>嘉永五年壬子六月</sup>」との内題が付されており、かつ朱による書き込みや本文中に傍点や圈点および傍線等がみられる（写真 2）。さらに、嘉永二年から同五年までの「別段風説書」からアメリカに関する記事の書き込みと、嘉永六年に実際に浦賀へ来航したアメリカ船情報をあわせた「防微錄」とともに、「<sup>嘉永五年壬子六月</sup>和蘭告密書御請取始末<sup>附米利幹渡米記</sup>」と記載された題簽が貼られた表紙が付され一冊に綴じられている。なお、「防微錄」は、朱書きも含め「和蘭告密書御請取始末<sup>嘉永五年壬子六月</sup>」と同筆である。したがつて、「竹田鼎の日記」に含まれる表題をもたな



【写真 1-2】『竹田鼎の日記』（中嶋宏子氏所蔵）：『受取始末』末尾

い『受取始末』を磐溪は入手し、朱の書き込みを入れたり、注目すべき箇所に傍点や圈点および傍線等を付したりしたうえで、「和蘭告密書御請取始末」という一括文書としての名称を与えたと考えられる。ただし、入手経路については、林家あるいは昌平坂学問所周辺からの情報提供の可能性もないわけではないが、入手時期も含め不詳である。



【写真 2】『嘉永五年壬子六月和蘭告密書御請取始末 附防徵錄』（宮城県図書館所蔵）

なお、朱書きを加えた本史料の成立時期は、その書き込みから推測可能である。「此度渡来之節、ヘルレイハ、シユスイハンナニ罷在候由」

と、実際の来航を受けた嘉永六年時点におけるコメントや、「一説ニ右船之使節を江戸ニ差越候命を受候由ニ有之候」という本文に対し、「來

春如此なるへし、可畏々々」と、翌年嘉永七年の再来航について注記で言及していることから、朱書き等は、ペリー艦隊が一時的に日本を離

れた嘉永六年七月以降、実際に再来航した嘉永七年正月以前までの期間に書き込まれたものと考えられる。これは、先の竹田鼎が『受取始末』

を書きとめた時期ともほぼ一致しており、『受取始末』はペリーが一度日本を離れた嘉永六年七月頃から流布し始めたと考えられよう。

また、このような『受取始末』に朱による書き込みがされているヴァージョンは、安中藩儒・添川廉齋が対外関係文書を収集・編纂した『有

所不為齋雜錄』や『外交雜纂』（作者不詳<sup>38</sup>）等にも含まれており、書き込みや傍点、圈点、傍線に至るまでほぼ同一である。すなわち、一連の

関係文書が一括されただけの『受取始末』が初め流布し、それを入手した磐渓が朱による書き込み等をおこない、その『受取始末』が別途流布したと考えられる。

最後に、日米条約締結前後の経過について、磐渓が入手した三種類の文書により明らかにした『和米始末<sup>39</sup>』について検討しておきたい。

「目次」は以下のとおり各種文書の収録意図も含め記述されている。

## 目次

「[レヒソン」<sup>40</sup>日本紀 嘉永四年辛亥 彼紀元一千八百五十年

此紀ヲ讀テ米利幹人未タ日本ニ至ラザル前ノ胸中成算ヲ察スベシ、

〈横浜下田二回条約

嘉永七年甲寅 彼千八百五十四年、

此条約ヲ讀テ米利幹人日本ニ至リテ後一二其期望通リニ叶ヒタルヲ知ルヘシ、

「[ボルトメン」<sup>41</sup>内密上書 同年八月、

此上書ヲ讀テ米利幹人和親後ノ情況ヲ見ルヘシ、

右三種ノ書ヲ讀テ米利幹人日本ト和親スル始末明白ニ領会スベシ、因テ名ケテ和米始末ト云フ、

嘉永甲寅秋九月 太平逸民某識

ここにみられるように、本史料はペリー来航以前におけるアメリカの対日方針、日米条約締結によりアメリカの要求がかなつたこと、条約締結後ににおけるアメリカの状況を伝える三種類の関連文書を、ペリーが日本を去つたあと嘉永七年九月に「太平逸民某」、すなわち大槻磐渓がまとめたものである。

『和米始末』には三種類の文書が含まれているが、一つ目の「[レヒソン」<sup>42</sup>日本紀】はすでに嘉永六年六月八日に林大学頭復齋への対外意見書にみられた「子年和蘭人風說書」<sup>43</sup>で、ペリー来航以前に入手したことはすでに指摘したとおりである。ここに収録された文書は、一八五〇年までにまとめられたパーマーからレフイスズブーンに送られたアメリカの対日政策についての情報のみならず、対日政策に関する記事が掲載された「告牒」、すなわち一八五一年にニューヨークで発行された新聞記事を含むものである。

二つ目の「横浜下田二回条約」は、嘉永七年三月三日に神奈川で締結された「約条」（神奈川条約）とその附録条約として、領事裁判権、通貨交換規定、遊歩区域等、開港場における細目について定め、嘉永七年五月二三日に下田で調印された「約条附録」（下田条約）の漢文和解である。神奈川条約は、本文上部に漢文版が和解の条文と対応するよう朱

で付記されている。

静嘉堂文庫所蔵『和米始末』の表紙に貼られた題簽（【写真3】）には、「磐渓 閔研両先生筆記」とあるが、磐渓とともに先生として記載されている閔研（藍梁）は、膳所藩に仕える儒者で、この当時主席応接掛・林大学頭復齋の補佐として、林家塾頭・河田興（迪齋）とともにアメリカとの交渉に臨み、条約漢文版の作成にかかわっていた。したがつて、

ここに収録された神奈川条約及び下田条約は、閔から入手したものと考えられる。閔と磐渓は同時期に昌平坂学問所で学んだ仲であり、『金海奇觀』にも、閔から提供された画像が含まれていることはすでに指摘した通りである<sup>(41)</sup>。ここからも昌平坂学問所関係者のネットワークの存在が確認できる。

三つ目の文書は、嘉永七年八月、アメリカ・蘭語通訳官ポートマンが下田奉行へ内密に提出した意見書である<sup>(42)</sup>。磐渓が記すように、下田条約



【写真3】『和米始末』（静嘉堂文庫所蔵）：表紙

締結後のアメリカの思惑が記されているが、「爰ニ一体之主意を記さん事を欲すれ共、其時機なれハ、巨細に書載する事甚難し」と、当時にあつてはまだ公表できない内容もあるとの断りを入れつつ、和親を取り結ぶことの重要性について述べている。

磐渓は、本来幕府によつて厳重に管理されるべき情報を活用して、アメリカとの間に「和親」関係が成立した経過を明らかにしたのである。

以上、磐渓は、「子年和蘭人風説書」と称したレフィスゾーン著『日本雑纂』、中浜万次郎による口述書、ペリー来航予告に関する追加情報の受け取りの経過を綴った『受取始末』、神奈川条約漢文並びに漢文和解、下田条約漢文和解、下田奉行宛ポートマン内密意見書を入手していたことを明らかにした。また、磐渓がそれまで蓄積してきた海外知識をもとに、これら重要機密情報を活用し、的確な対外意見を述べてきたことも判明したのである。

## 二 ペリー第二回来航前後の実地見聞と情報の活用

大槻磐渓は、ペリー来航時に、藩命により現地へ実際に赴き情報収集活動をおこなつたことについては、『磐翁年譜』ならびに『磐渓先生事略』によつていたことは指摘した通りである<sup>(43)</sup>。また、嘉永六年六月の第一次來航時については、『磐翁年譜』ならびに六月八日付林大学頭復齋宛上申書から、六月三日から七日まで浦賀へ探索を行つていたことは確定する。しかし、その時の情報収集活動の結果については、七日までの探索の結果、浦賀へ来航した異国船がどこの国のあるか判明しなかつた<sup>(44)</sup>ということだけである。先行研究が参照している『磐翁年譜』および磐渓が子の如電等へ話し聞かせたことをまとめた『磐渓先生事略』にも、第一回ペリー来航時における具体的な情報収集活動については触

れられていない。

一方、嘉永七年の第二回ペリー来航時の情報収集活動については、『磐翁年譜』ならびに『磐渓先生事略』のいずれも、嘉永六年同様具体的に情報収集活動については記述されていない。仙台藩主・伊達慶邦へ上呈した『金海奇観』ならびに、自身が収集した画像を張り交ぜた『塵積成山』から、その活動が推測され、語られてきたにすぎない。

ここでは、これまで積極的に利用されてこなかった『米夷紀事』と題する自らの情報収集活動状況についてまとめた史料<sup>(45)</sup>により、第二回ペリー来航時における磐渓の情報収集活動<sup>(47)</sup>ならびにその活用実態についてみていただきたい。

#### （1）第一回浦賀調査…嘉永七年一月三日～七日頃

『磐翁年譜』には、「正月十五日米国船再び渡来ニツキ命を奉ジ数度浦賀神奈川ニ往復復命ス」<sup>(48)</sup>と、嘉永七年一月一五日に藩命により浦賀へ向かつたとされている。しかし、磐渓はすでに藩命を待たずに、磐渓自身の判断により、ペリー再来航一〇日ほど前の一月三日、塾生一人をともなつて浦賀へ向かっている。今回の調査は、「辺備ヲ問ント欲シ」とあるように、ペリー再来航が予告された時期を見計らい、それ以前に浦賀の海岸防禦状況を確認することが目的であつた。

四日浦賀奉行所がある西浦賀へ到着すると、前年ペリーとの応接にあつた浦賀奉行与力・中島二郎助を訪ね、その後東浦賀へ渡り、「船小屋ノ後ノ岸ヨリ港中ニ浮ヘタル船」を観ている。「二十間ノ異国製ノ船」と記述されているこの船は、この年六月に日本初の西洋式帆船として竣工する鳳凰丸である。磐渓は鳳凰丸を実際に視察するとともに、「委クハ、図并仕法帳アリ」と、鳳凰丸に関する詳細については、別途図面と建造法についてまとめたことを示唆している。情報収集を目的として浦

賀を訪れたのであるから、詳細を記録することは当然であると考えられている。国防上の重要機密事項を、建造担当者である中島自身から直接入手していたのである。

そして翌五日は対岸の東浦賀に設置されている砲台を見学している。ペリー艦隊の再来航に備え築造されていた明神崎台場であると思われる。しかしここを見学した磐渓は、正月休みのため作業が中断していることを知り愕然としている。日本では正月期間であるが、西洋暦では一月末か二月にあたることから、ペリー艦隊がいつ再来航してもおかしくない状況であるにもかかわらず、臨戦態勢とは程遠い弛緩した雰囲気を嘆いたのである。

その後、中島の役宅において、アメリカ使節の応接場所の準備を進めていた「加山英左衛門」、すなわち中島の同役である香山英左衛門から、応接場を鎌倉の光明寺として準備していることを聞かされている。そして、七日には江戸へ戻る途中、本牧の先端に位置する本牧十二天社を参詣し、さらに本牧周辺の警衛にあたつていた熊本藩の陣屋跡と、当時警衛を命じられていた鳥取藩が建設していた陣屋を巡査しているが、その状況について、「到ル處辺備懈惰嘆息ニ堪ヘス」との感想をもつて帰府している。

#### （2）江戸での情報収集…嘉永七年一月一二日頃～二四日頃

江戸に戻った磐渓のもとへペリー艦隊再来航の報が達したのは、一月一〇日のことであった。このときの情報は、駿河沖に異国船が出現し、内三艘が港へ接近し、残り二〇艘が遠洋にとどまっているという事実とほど遠いもので、その情報の出所も明らかにされていない。

しかし異国船の来航は事実であり、一月一二日に葦山代官・江川太郎左衛門から、一日に船籍不明の異国船六艘が伊豆・城ヶ島沖で確認さ

れたという報告が飛脚便によりもたらされた。そして、一二日には四艘の異国船が城ヶ島に接近し、すぐに退去したことが伝わってきていることや江戸ではイギリス船かフランス船であろうとの噂がながれていたことが記されている。

このような情報が流れるなか磐溪は、「亞墨ノ探船ニテ駿州豆州辺ヨリ相州海岸ノ辺備ヲ探索スル為ニ先ツ越シタルナルベシト思ヘリ」と、駿河・伊豆周辺の海防状況を確認することを目的に、ペリー艦隊の先遣隊が来航したと推測している。

次に一四日、一五日のペリー艦隊の動向について詳細が伝えられ、一九日の朝には、浦賀から江戸へ戻ってきた上田藩士・恒川才八から最新の報告を受けている。恒川は、西洋砲術家で信濃国松代藩士・佐久間象山の門人であつたことから、象山とも親交があつた磐溪へ情報を提供したと思われる。

このように、磐溪は江戸にいながらにして、各種ルートから浦賀へ再来航したペリー艦隊の情報を逐一収集しつつ、その一方で、幕府および諸大名の動きについても見逃してはいなかつた。

恒川から浦賀情報を入手した一九日に、すでに応接掛として浦賀へ向かつた伊沢美作守政義に加え、前日一八日に幕府が林大学頭復齊、井戸対馬守覚弘、鶴殿民部少輔長鋭、松崎満太郎を応接掛として浦賀へ派遣することになったことを知った。これについて磐溪は、戦端が開かれたさい、江戸市中の混乱が予想されるにもかかわらず、江戸町奉行の職にあつた井戸覚弘の後任人事を怠つた幕府の危機感の欠如を痛烈に批判している。

また、応接場の警衛担当藩をめぐつて、細川家と毛利家は勇ましく自ら担当することを幕府へ建白したが取り入れられず、一五日になつて真

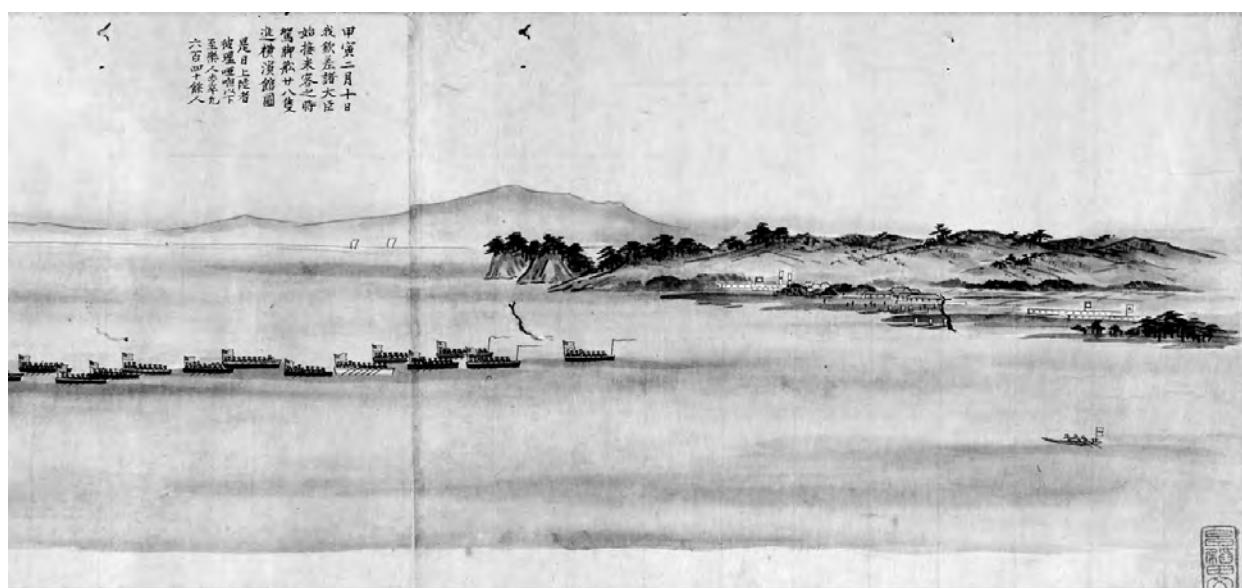
田家と小笠原家が任命されたとの情報を得ている。

なお、細川家に関連して、嘉永六年のペリー来航時、本牧の守衛を担当したさい、「貫目以上之筒百五十挺」を川口鑄物師増田宗次郎へ命じたこと、その総額が一五万両となることが欄外に付記されている。西洋砲術に高い関心を持っていた磐溪は、このような兵備状況にも強い興味を抱いていたことがうかがえる。また、応接場の警衛に関連して、費用負担が五〇万両の見通しであることが記述されている。

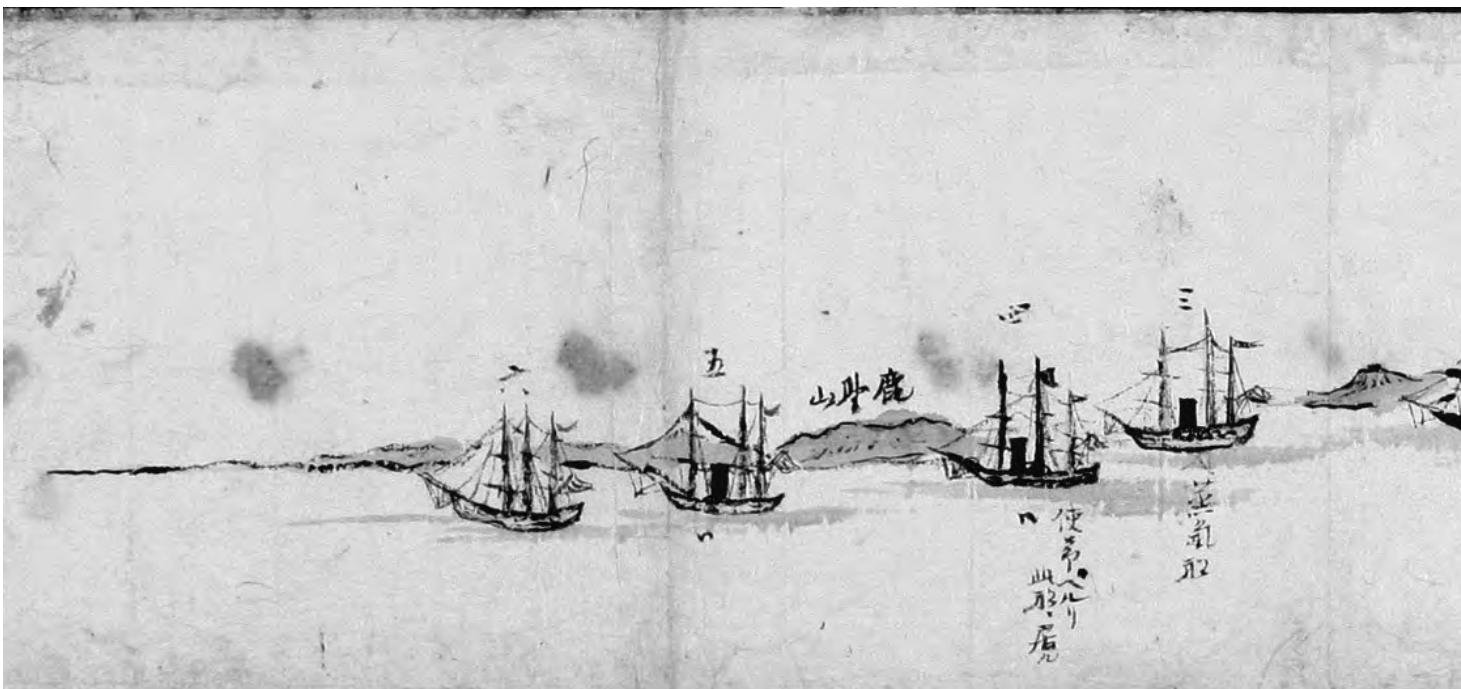
### (3) 第二回浦賀調査..嘉永七年一月二二五日、

ペリー第二回来航にあたり磐溪へ藩命が下つたのは、来航から約一日後の一月二三日であった。仙台藩主・伊達慶邦より「浦賀ニ赴クベキ命」が正式に発出されたのを受け、二五日に磐溪は「画師辻探昌」をともなつて浦賀へ出発している。なお、ここに絵師として辻探昌の名がみられるが、この絵師についてはよく知られていない。『金海奇觀』中の図像にもその名は見いだせず、そもそも絵師をともなつていたことはこれまでも推測されてはいたが、具体的な絵師についての記述があつたのはこれが初めてである。いずれにせよ、すでに再来航が予告されていたことから、再来航時に備え絵師を同行させることを想定していたと思われる。

江戸を発つた磐溪は、浦賀へ向かう途中も情報収集に余念がなかつた。磐溪が注目したのは、日本との通商を迫るペリー艦隊の再来航により、条約交渉の進捗状況によつては戦端が開かれかねない危機的状況のなか、江戸周辺の海防態勢はいかなる状況にあるのかということに関心を持つていたのである。土佐藩が担当する浜川砲台、松山藩の防備状況等についてその土裏の積み方に至るまで、微細に観察している。そして金沢では、本牧から浦賀まで一望している。すなわち、「扇屋トイヘル茶



【写真5】『金海奇観』（早稲田大学図書館所蔵）：ペリー艦隊



【写真4】『塵積成山』（一関市博物館所蔵）：磐渓が描いたペリー艦隊

肆ノ前ナル昆比羅ノ丘ニ登リ、縮遠鏡ヲ出シ、小柴・本牧ノ洋ニ掛リタル夷船」を確認したところ五艘であつたが、土地の者の話では、七艘のうち一艘は本牧へ、もう一艘は前日に浦賀へ向かつたということであった。このような様子については、自らスケッチしたり（写真4<sup>50</sup>）、『金海奇観』に収録した津山藩絵師・鍬形赤子が艦船を描いた絵に来航時期を明示したり（写真5）、自らが入手した嘉永六年の『別段風説書』の記事と比較し、異同について確認している（写真6<sup>51</sup>）。幕府が入手していた海外情報の信憑性について、自らの探索により入手した情報をもとに確認しているのである。ここに収集活動により入手した情報の活用の一端が見られる。

二七日に浦賀へ到着すると、一二五日に上陸した副将アダムスに関する情報を収集している。この時期ペリーは病気を理由に一切表に出ず、予備交渉はすべてアダムスに任されており、実質的なアメリカ側代表として行動していた。予備交渉では、幕府側も序列を重んじ、伊沢、鶴殿、松崎の応接掛に、浦賀守力組頭黒川嘉兵衛と辻茂左衛門が応対したことを見き出している。そして、アダムスは横柄な態度をとつていたが、伊沢が「鍼扇ヲ開閉シテパチリトイフ音シケレバ、アハダムス忽チ劍把二手ヲカケタ」ということから、実は小心者ではないかとの人物評価をくだしている。

また、磐渓がもうひとり気にかけた人物がいた。その人物について以下のように描写している。

応接ノ日夷船浦港ニ入ル時空砲十發早速放ニ打タリ、抜帝刺ニテ港中ニ入上陸シテ一人袖間ニ小冊子ヲ挟ミ、腰ニ墨斗ヲ挟ミ、処々立

留リ、山川土地ノ形勢ヲ図スル容子也。

この人物は、ペリー艦隊隨行画家のヴェルヘルム・ハイネである。船船



【写真6】『甲寅裸録』(宮城県図書館所蔵)

また、応接場所をめぐつて新たな情報を得ている。今回の交渉も、当初は鎌倉の光明寺でおこなうことで幕府側は準備を進めていたが、より江戸に近い場所を望むアメリカ側の要求により、浦賀に変更していた。しかし、浦賀が狭隘の場所であることを理由に再度応接場所の変更が求められたことから、神奈川宿と本牧との間の横浜に変更することに決したという。この、応接場所が横浜になつたことについて、磐渓は初め誤報ではないかと疑つたが、事実だと知り驚愕している。幕府がアメリカの要求を易々と受け入れる姿勢に驚きを禁じ得なかつたようである。

そして、実際のアメリカ使節の動向を探索し、アメリカ側の意図について考察するとともに、一国へ交易を許可した場合他国へも同様の対応をとる必要があるとの認識を持つに至つている。磐渓は、常々ロシアからの交易要求を拒否しておきながら、ロシアより先に他国へ許可することはロシアに対し信義を失うとして、ロシアとの交易を優先させるべきだとする立場をとつていた<sup>(52)</sup>。したがつて、ロシアを差し置きアメリカとの交渉を進めようとする幕府の対応にも不信感をもつていたと思われる。

#### (4) 第一回横浜出張・嘉永七年二月一〇日(一)

浦賀の出張から一度江戸へ戻つた磐渓は、二月九日午後、翌一〇日に横浜で交渉が始まるとの情報を得ると、塾生の横手信太郎<sup>(53)</sup>をともなつて江戸を出発し、その日は川崎に宿泊した。すでに記したように、正月二日から浦賀調査をおこなつた際も、塾生ひとりをともなつていたが、この「塾生」も横手であつたとも考えられる。

そして、応接当日の一〇日、神奈川宿の台（現在の横浜市神奈川区台町）において宮内彦太郎なるものと合流し、横浜へ向かつてゐる。磐渓と彦太郎とはすでに付き合いがあり、磐渓は事前に横浜での応接を見聞を描く等、記録係としての役割を果たしていることに注視している。

することを彦太郎と約束していたようである（【写真7】）。

銚子出身の彦太郎の父・秀三の伯父にあたる宮本茶村は、常陸国潮来

村の名主であったが、山本北山に儒学を学んだ儒学者であり、私塾で子弟の教育に当たるとともに、水戸藩主・徳川斉昭による「天保の改革」に協力したことで郷士に取り立てられた人物であった。その兄、宮本篁

村は茶村同様山本北山に学んだ後、仙台藩の藩校明倫養賢堂の学頭として藩校改革を実行した大槻平泉に学び仙台藩儒となつた人物である。宮本家と、仙台の大槻家と親交があつたことから、宮本家と姻戚関係ある宮内家と仙台の大槻家と同族である江戸の大槻家とが親交をもつていたとしても不思議ではない。事実磐渓自身が弘化四年に銚子を訪れていた<sup>(55)</sup>。したがつて、磐渓と彦太郎とが行動を共にすることは何ら特別なことではなかつたのである。

なお彦太郎は、昌平坂学問所で塙谷岩陰に師事しており、一〇日の横浜応接の様子は、岩陰の弟である實山とともに観ている。また一一日には蒸気船へも搭乗していることが、彦太郎が認めた書翰に記述されている（【写真8】）。

そして磐渓は、続けて横浜周辺で流布していた「噂」を中心に収集し、記録している。これらのほとんどは、情報源がよくわからない、虚実入り交じつた情報である。

まず、「某藩士筆記中抜書」が記述されている。船内で死亡したアメリカ兵が一月一一日に増徳院へ埋葬された状況を伝えるもので、墓石に刻まれた銘等についても言及している。墓石を描いた画像は多方面に流布しているが、情報源の一つであると思われる。そしてここで注目すべきは、「墓表ノ文字写、二葉アリ、村上英俊ガ訳セシ文如左」という記述である。墓石の図に記載された英文を翻訳したのは、村上英俊という



【写真7】「嘉永七年二月二日付秀藏宛宮内彦太郎書翰」（宮内敏氏所蔵）



【写真8】「嘉永七年二月一二日付秀藏宛宮内彦太郎書翰」（宮内敏氏所蔵）

人物であるというのである。そして、欄外に「村上ハ真田侯ノ医也」と注記されている。横浜の警衛にあたっていた松代藩の医員である村上英俊は、フランス学の祖として有名な人物であるが、これまで知られていないかった村上の活動がここで明らかになつていて、村上英俊は津山藩医宇田川榕庵に師事する等蘭学者・洋学者としても知られていたようであり、また佐久間象山が軍議役として横浜の警衛をおこなつていた松代藩医であつたことから、磐渓はすでに村上についてもなじみがあつたと思われる。

次に、「二月十五日貢献之事」と題された一節は、「塾生横手信太郎、駒藏二人、中津藩ノ士」からの報告である。この日に陸揚げされたアメリカからの献上品について詳細に記述されている。献上品ではないが、アメリカ人がもつていた洋傘や彼らが着用していた雨合羽に注目しており、洋傘について欄外に絵入りで解説を加えている。また、アメリカ兵に関する記述もみられ、農家で食事をしたさい飲酒のうえ狼藉を働くいたことが記録されている。

さらに、「或人聞見記中抜書」は、アメリカの要求が「通商交易地所借用所望之由」であるとし、幕府の対応がだらだら交渉を進め、最終的に通商交易は認めず、「通信」すなわち国交を認め、必要物資の提供には応じるのではないかとのちの「和親条約」締結を予測したような記載がみられる。そして、「通信」さえ認めなかつた場合、眞偽はわからぬとしながらも、ペリーは英仏軍と連合して日本を攻めるつもりであろうと推測している。また、アメリカ人の姿勢に言及し、「殊足ハカクノ如ニテ、鳥獸ノヨウ也、目ハ薄暈リ、茶色ニテ此方ニテ近眼トイフモノ、如シ、鶏ノ目カスミタルヨウ也、肌膚モ鳥ノ羽ヲムシリシ跡ノ如ク、其旁ヲ通行スル時ハ、犬ノ毛ヲ逆ニ撫タル時ノ如キ臭氣アリ」と



【写真9】「船大将歎差大臣提督海軍統帥まつちうせべるり」（黒船館所蔵）

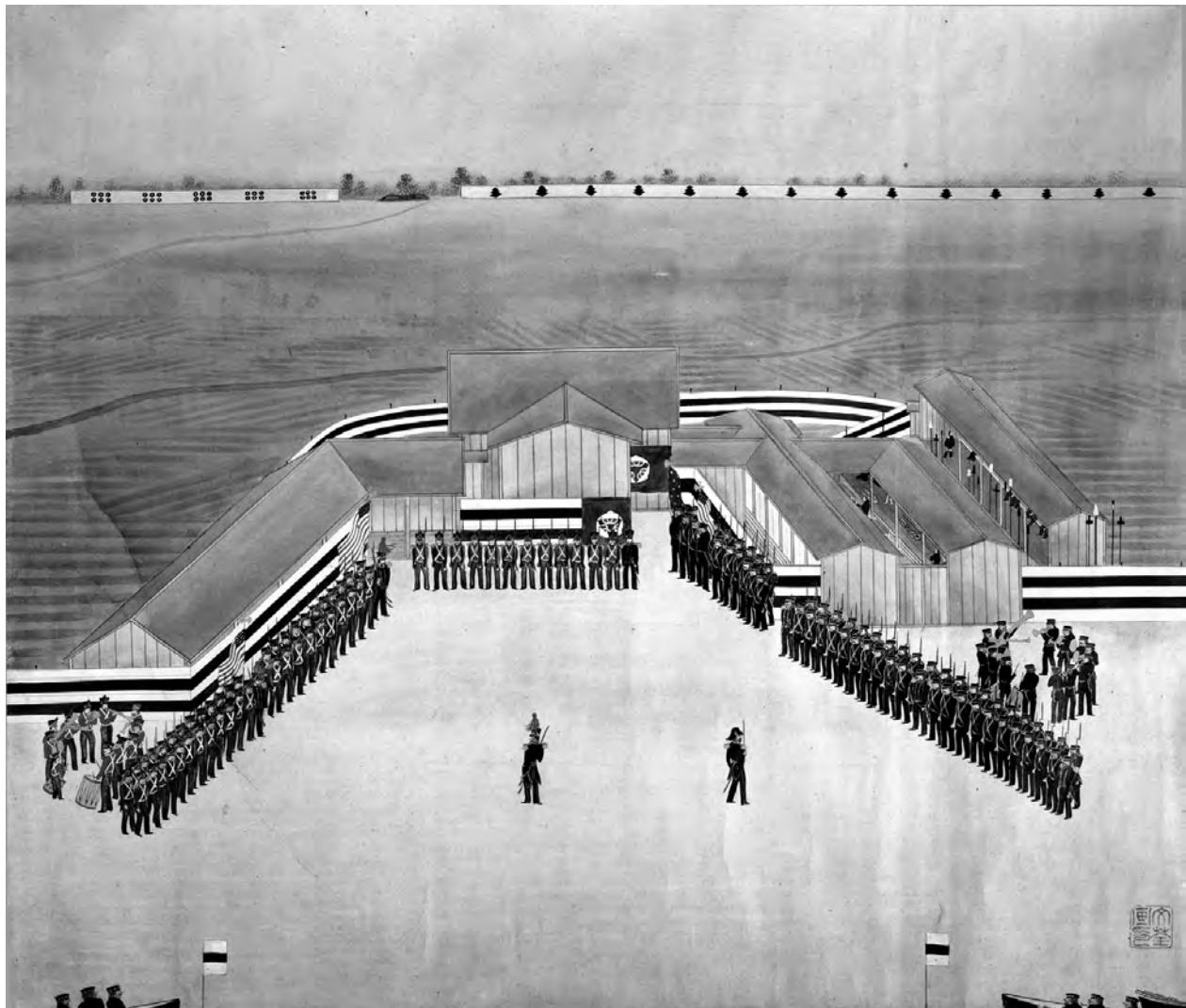
動物のようだと記している。この記述にもとづくような画像（【写真9】<sup>58</sup>）があることから、この記述をもとにこのような画像が制作されたと類推される。

なお、今回の出張がいつまでおこなわれたかは明確にされてはいないが、次節で示すように、二月一七日時点で磐渓は江戸に戻っている。一〇日の応接の状況を見聞後、横手等に情報収集を任せ、早い段階で一時帰府していたと考えられる。

#### （5）第二回横浜出張・嘉永七年二月十九日

再度交渉がおこなわれるとの情報を得て、磐渓は二月一七日に江戸を発った。その日は、神奈川宿に投宿したが、そこで一八日は雨のためアメリカ使節が上陸できないことを理由に一九日に延期されることになつたことが知らされる。

そしてその一九日に上陸の様子を実見した磐渓は、以前から西洋軍事

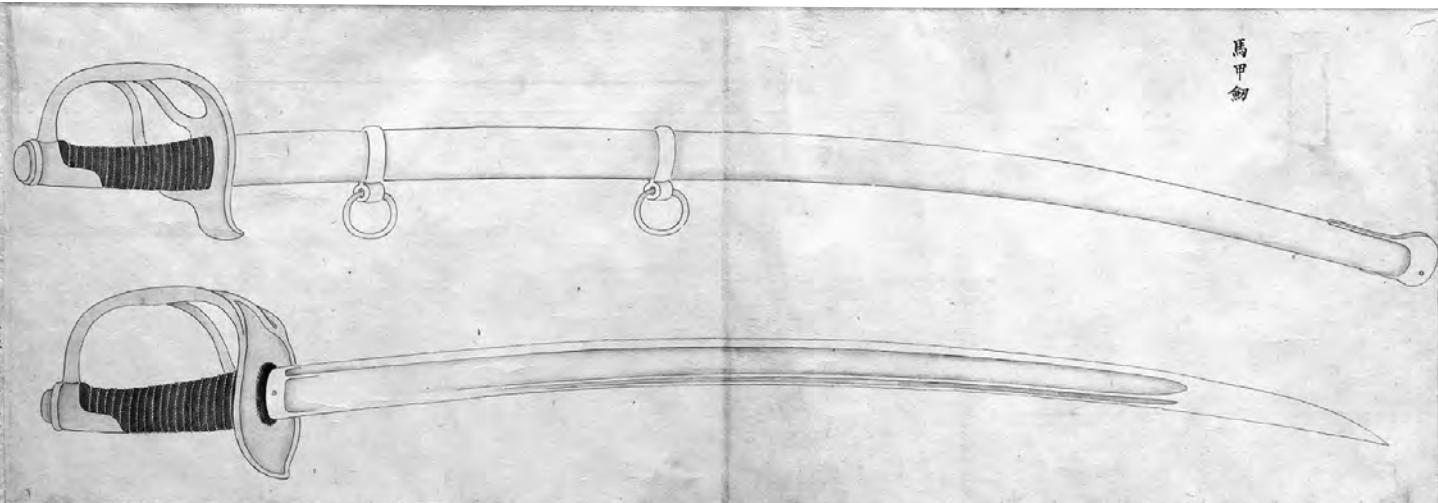


【写真 10】高川文笙『横浜応接場米利固銃隊布列図』(真田宝物館所蔵)

技術に興味を抱いていたこともあり、上陸時のアメリカ兵の儀仗に強い関心を寄せ、兵士の服装からその所作にいたるまで微に入り細に入り描写している。この状況については、横浜応接場の警衛を幕府から命じられた松代藩真田家の藩医・高川文笙（身分は藩医であり、藩医として横浜警衛に加わっていたが、もとは谷文晁に学んだ絵師である。）が描いており、その図（写真10）と磐溪の記述は一致している。なお、アメリカ人の体臭について触れており、「腐魚ノ臭ニ似タリ故」船中では香を焚いていることを紹介している。

さらに『金海奇観』に収められている図に関する記述が以下のように続く。

松崎ニ呈セル六弾仕掛けヒストオルヲ觀タリ、引金ノ上ニ蓮実ノ如ク六丸ヲ容ルベキ穴アリ、捻ヲ以テ廻ス時ハ、六穴順々ニ廻ルヨウニナレリ、長サ九寸斗、照星アリ、別ニ鑄型アリ、釘錨ヲスクタメノ道具アリ、玉ヲコムル仕掛けノ胴袋アリ、又星上ノ刀ヲ觀タリ、刃長サ三尺二寸斗、鞘モ金ニテ制セリ、錫ノ堅キモノニ似タリ、鉄モ金ニテ作ル、長サ四寸餘、腕抜ノ金アリ、真鍮ヲ以テ作ル、三本アリ、片手持ト見ヘタリ、刃ハ片刃ニテ鉛ノ如ク鋒刃極メテ鈍ニシテ、豆腐庖丁ノ如シ、指ヲ以テ摩ストイヘ凡、傷ツク「ナシ、血槽アリ、ハ、キノ処モシバノ如キ織



物ヲ付タリ、鯉口ノ内一寸斗下ニ簫ノ舌ノ如キモノ双方ヨリ出テ開閉ヲナスヨウニ作レリ、刃ヲ容ル寸ハ自然鞘走ヲト、ムルタメトト、見ヘタリ、

『金海奇觀』に収録された「馬甲剣」と「Colt's Pistol 六響手銃」（写真11<sup>(6)</sup>）は、応接掛であった昌平坂学問所教授・松崎満太郎へアメリカが贈ったものを実見していることがわかる。磐渓は、松崎への贈答品を実見しそれぞれの絵を描き、『金海奇觀』へ収めていたのである。『金海奇觀』の成立についても、新たな事実がここに明らかになつたのである。

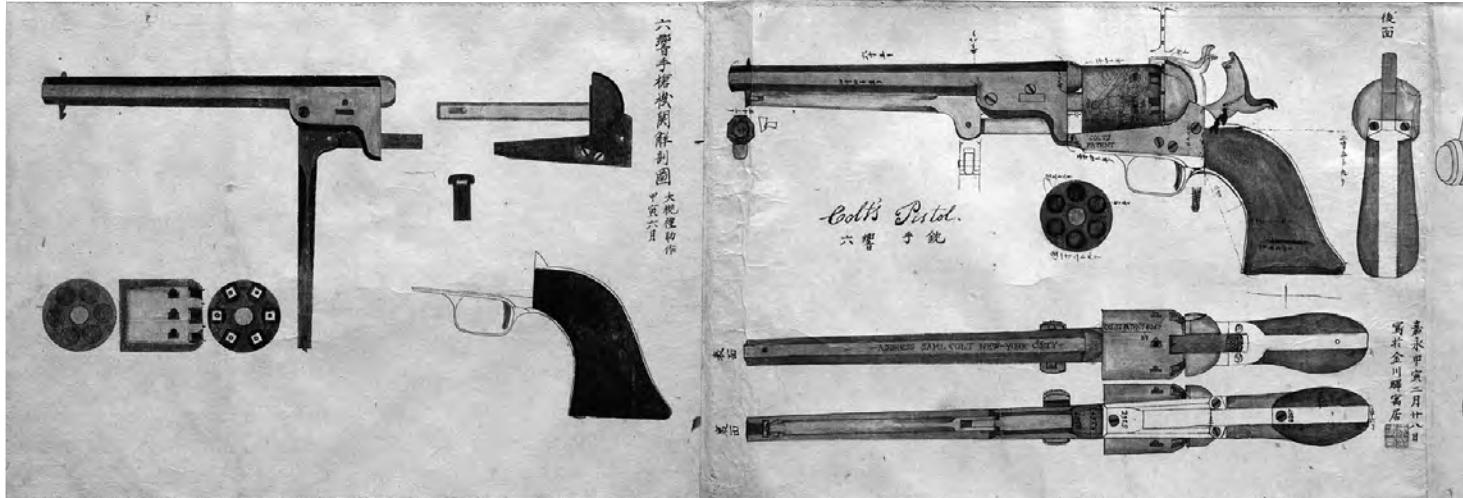
また、磐渓は松崎への贈答品に限らず、さまざまな献上品を実見している。

○蒸氣船ノ図アリ、月夜ニ浮ヘタル図也、○林氏ヘ呈スル品ノ内ニ火口ヨリ鉛弾ヲコムル仕掛けノ短筒アリトイフ、又墨是可ト墨夷トノ戦図、弁ニ戦記アリト聞ケリ、林氏ニ呈スル品十五種、松崎ニ呈スル品五種トイフ、

月夜に浮かぶ蒸氣船の図や、応接掛筆頭・林大学頭復齊へ贈られたピストル、ならびに「アメリカ・メキシコ戦争図」<sup>(6)</sup>等も観てていることがわかる。昌平坂関係者である応接掛一人から、贈呈間もない実物を観る機会が与えられたのである。

そして、「呑存山人」からの情報が綴られている。二月一〇日の応接の状況、一五日の献上品に関する情報のほか、日本語通訳ボートマンや、漢語通訳羅森についての記事も含まれている。また、アメリカ使節が連れ帰ってきた紀州の漂流民寅蔵について、日本側へ引き渡した場合、厳罰に処されるとの話を聞いたアダムスが、寅蔵の日本への引き渡しを拒もうとしたエピソード等もみられる。

さらに、一九日の応接終了後、長州藩士からの情報として、二二日に



【写真 11】『金海奇觀』(早稲田大学図書館所蔵)：「Colt's Pistol 六響手銃」と「馬甲剣」

黒川嘉平衛等が下田へ向かうのにあわせ、アメリカ船二艘も下田へ回航するということから、磐渓は下田が開港場となることを確信している。このほか、徒目付・平山謙次郎が、羅森に對して暴言を吐いたとか、横浜の百姓の家にアメリカ人が押し入つて妊婦を暴行して死なせた等、虚偽入り乱れた情報も収録している。

#### まとめにかえて

ペリー来航時において大槻磐渓が情報収集活動を積極的におこなつていたことは一般にもよく知られているところであつたが、具体的にいかなる情報源からどのような情報を入手していたのかということは明らかにされてきてはいなかつた。そこで本稿では、まず磐渓の海外知識の情報源について、磐渓の対外意見書を執筆するにさいして根拠とした書籍を『大槻文庫書目』を参照し明らかにした。また、本来幕府によつて厳重に管理されるべき対外関係文書を入手していいたことも確認した。磐渓はこれらの文献や文書にもとづき、的確な意見を述べていたのである。入手した情報を活用していた恰好の事例である。

さらに、ペリー来航時の情報収集活動についても、これまで活用されてこなかつた『米夷紀事』をひもとくことによつて自らが調査したことにより加え、情報源となつた人物や当時流布していた「風説」についても確認することができた。特に情報源となつた人物としては、まず幕府関係者で、浦賀奉行与力・中嶋三郎助、同・香山英左衛門があげられる。昌平齋関係者である林大学頭復齊、松崎満太郎から実際に献上された物品を観る機会が与えられ、のちにそれをもとに描いた図を『金海奇觀』へ収録することとなつた。

また、上田藩士・恒川才八からさまざまな情報を得ていたこと、儒者

仲間である宮内彦太郎と行動と共にしていたことも確認できた。一方、蘭学・洋学関係者である松代藩医・村上英俊とのつながりがあつたことも類推できた。さらに、磐渓に同行したものとして仙台藩絵師・辻探昌や塾生・横手信太郎、同・駒藏の名前を明らかにすることができたのである<sup>(2)</sup>。

その他、具体的な姓名は明らかではないものの、中津藩士、長州藩士等、他藩の探索方からの情報や、土地のものからの嘘か誠かよくわからぬ情報まで、ありとあらゆる階層の情報を可能な限り入手していたことも明らかにすることができたであろう。

ただし、本稿では触れられなかつた問題が残つたのも事実である。

まず、磐渓が収集した情報の信憑性については、まったく触れることができなかつた。これは、今回活用した『米夷紀事』に記載されている情報の信憑性について、磐渓自身情報の信憑性を問題にしていなかつたこととも関係している。つまり、虚実を問わず、入手できた情報については記録しておくというスタンスで情報を取り扱つていたからであるが、情報を活用するうえでは、収集した情報のなかから「真」であると判断したものを意識的に選び出して利用する必要がある。すなわち、磐渓はいつかの時点で収集した情報の真偽を区別しなければならないのである。

次に、大槻磐渓の評価に関する課題を指摘しておきたい。大槻磐渓は開国論者であるのか、あるいはいつから開国論者となつたのか、という問題である。磐渓を開国論者として位置づけたのは磐渓の子孫であり、それを踏まえ後の歴史研究者がその地位を通説にまで押し上げていた。しかし、「献芹微衷」をはじめ磐渓が著した対外意見書を読み直してみると、「開国論」として位置づけることについて再考を要すると考える。

さらにそれから派生して、そもそも「鎖国」と開国という二項対立的な見方でこの当時の对外意見書を読むこと自体に問題があるのでないかと思われる。「鎖国」・開国という概念から一度離れ、当時の状況を踏まえたうえであらためて当時の史料にあたつていくことが必要ではなかろうか。「鎖国」・祖法觀の問題も含め、今日、我々が「鎖国」と定義している状態を、当時の人々は如何に認識していたのかをあらためて確認したうえで、その状態を変更することがいかなる意味を持つていたのかを問う必要があろう。

最後に、些細な問題ではあるが、一括されただけの『受取始末』と朱による書き込みをもつ『受取始末』の成立ならびに伝播についても幕末情報史研究において検討を要する課題である。『バタヴィア総督公文書』と『日蘭通商條約草案』の受取可否の経緯を記した事務文書を一括してまでなぜ入手する必要があつたのかということ自体問題である。すなわち『風説書』、『別段風説書』以外のオランダからの公文書の『受取可否』という手続きになぜ注目が集まつたかということである。さらに、それに対して朱書きによる幕政批判を含んだ『受取始末』が必要とされたのかも興味深い問題である。阿部正弘が、海防関係者へ回達したという事実も含め検討するに値する課題である。

## 註

- (1) ペリー来航前後の情報収集活動については、岩下哲典『幕末日本の情報活動－開国情報史－』（雄山閣、初版・一九〇〇年、増補改訂版・一九〇八年、普及版・一九一八年）をはじめ多くの蓄積がある。収集活動の主体別に、大名、藩士、豪農など階層ごとに研究成果が報告されているが、紙幅の関係からすべて

を紹介することはできない。したがって本稿が対象とする、儒学者による情報収集活動に関する先行研究については、以下で適宜触ることとし、それ以外の研究成果については、岩下、前掲書を参照願いたい。

なお、嘉永七年二月、ペリーがはじめて横浜へ上陸した直後に江戸から横浜へ派遣された松代藩士は、横浜へ向かう途中、川崎宿を過ぎたころより、「諸家の物見とミえて、既数騎万年屋などに憩ひたり」（『神奈川公役日記』『開港日記』東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）と記しており、多くの藩の探索方が活動していたことがわかる。詳細については、嶋村元宏「ペリー来航に関わる情報収集活動とその伝播について—画像資料を中心に—」（『神奈川県立博物館研究報告—人文科学—』第四一号）を参照のこと。なお本稿は、神奈川県立歴史博物館が二〇一二年に開催した特別展『ペリーの顔・貌・カオ—黒船の使者の虚像と実像—』に合わせ発行した展覧会図録に収載した「ペリー来航前後の情報収集活動」で明らかにした新知見を核に学術論文としたものである。

(2) 『津山市史』（第五卷 近世III—幕末維新）、一九七四年）五〇七頁。津山藩の『江戸』日記（津山市立郷土博物館所蔵）により、箕作と鍼形が、船上からア

(3) 西村直城「嘉永七年、アメリカ船を見学した福山藩士に関する資料について」『広島県立歴史博物館紀要』第一六号。

嘉永七年二月十日から始まつた横浜での応接のさい、江木と石川が幕府応接掛井戸弘道の配下として、アメリカ使節の動向を探索したこと等が記された記事を含む「雑綴」（『窪田家文書』広島県立歴史博物館所蔵）等を紹介している。江木は頼山陽ならびに古賀桐庵に、石川は頼山陽に学んだいすれも福山藩の儒学者である。儒学者がペリー来航時の探索をおこなつた事例の一つである。なお、同内容の記録が、『金川遊記』として、関西大学図書館増田涉文庫に所蔵されている。神奈川県立歴史博物館では、関西大学図書館の許可を得てその副本（電子複写版）を所蔵している。

(4) 大槻文彦『磐翁年譜』私家版、一八八四年。嘉永六年の項には、「六月三日亞米利加船渡來其見届ヲ為セレ浦賀ニ往復シ復命スル「兩度」とあり、嘉永七年の

項には、「正月十五日米国船再ヒ渡米ニツキ命ヲ奉ジ數度浦賀神奈川ニ往來復命ス」とあるのみで、磐渓の活動の詳細については全く触れられていない。なお、磐渓の伝記的研究である大島英介『大槻磐渓の世界—昨夢詩情のこころ』（宝文堂、一〇〇四年）は、その記述の多くを、『磐翁年譜』ならびに清修述・清復補・茂雄等記『磐渓先生事略』（私家版、一九〇八年）に拠つており、磐渓の情報収集活動については、両史料の記述以上のことを明らかにしていない。

(5) 『金海奇觀』の成立については、嶋村、前掲論文、ならびに岩下哲典「解説 大槻磐渓編『金海奇觀』と一九世紀の日本」（『復刻 金海奇觀』雄松堂、二〇一四年）を参照。なお、江戸東京博物館も『金海奇觀』と題する画巻を所蔵している。加賀藩儒者・西坂衷（成庵）が、大槻磐渓から磐渓が編纂した『金海奇觀』を借用のうえ、一部を写したものである。両者の関係及び西坂による『金海奇觀』の成立については、嶋村、前掲論文参照。

(6) 嶋村、前掲論文。

(7) たとえば、梅沢秀夫「朱子学者大槻磐渓の西洋觀」『清泉女子大学紀要』第三四号。

(8) たとえば、島森哲男「大槻磐渓の漢詩」『宮城教育大学区紀要』第五四号、杉下元昭「大槻磐渓と『本朝通紀』・『王朝の文人と江戸漢詩』補記」『日本漢文学研究』第一二号、等。

(9) たとえば、野村正雄「津山藩主松平斉民と大槻磐渓各々の貼込帳に残る西洋の版画数枚の委細解明と二人の交流」『一滴』第一七号、大島英介「磐渓文稿」の想念について——大槻磐渓と頼山陽の出会い』『修紅短期大学紀要』第二四号、等。

(10) 工藤宜「江戸文人のスクラップブック」（新潮社、一九八九年）。なお、『塵積成山』は、現在一関市博物館が所蔵しており、二〇〇六年七月には、『塵積成山』を紹介したテーマ展『塵も積もれば—磐渓先生の貼り交ぜ帳—』が開催されている。また、その展覧会を担当した小岩弘明氏によつて「塵積成山」について紹介した「大槻磐渓の貼り交ぜ帳について」（『一関市博物館研究報告』第一〇号）がある。

- (11) 鵜飼幸子氏が参照した『献芹微衷』は、大正一四年に『磐溪先制』として『昨夢詩曆』と二冊組で発行された活字本一冊と、その刊行にさいしての稿本と思われる一綴り、「仙台文庫叢書」第一篇の七に所載の写本、及び今泉州氏旧蔵の写本一冊の計四種ならびに、早稲田大学図書館所蔵の磐溪自筆稿本二冊である（「大槻磐溪と開国論」「仙台市博物館年報」第六号、一九頁）。
- (12) 『大日本古文書 幕末外国関係文書』第一巻（東京大学出版会、覆刻一九七二年）一二二号文書（以下、「幕末」一一一二）のように、卷数と文書番号により略記する）。本文中の文書名は、「幕末」で使用している件名による。
- (13) 『幕末』一一三二。
- (14) 『幕末』一一三一。
- (15) 『幕末』三一一三。
- (16) ②、③、④、⑤は、それぞれ「米利幹議」、「米利幹議」、「魯西亞議」、「魯西亞議」と表題が付され、「續獻芹微衷」としてまとめられている。そして①と「續獻芹微衷」とをあわせ、「獻欣微衷 正統」の標題のもと一冊とし、さらに開国の意向を詩に詠んだとする漢詩集『昨夢詩曆』一冊と合わせ『磐溪先制』全二冊として大正一四年に出版されている。編者である大槻如電、文彦、茂雄による連名の後書きによれば、本書は、前年に大槻磐溪が贈位されたのを機に、磐溪がいち早く開国の立場をとつていたことを示すことを目的として編集、発行したものであることを明らかにしている。
- (17) 『磐翁年譜』「嘉永二年」の項。「閣老阿部侯ガ外防ノ論文ニ因リ十月三日獻芹微衷五篇ヲ上ル其隣交篇ハ魯西亞ト相交ルベキ利害ヲ説ク」（七頁）とある。
- (18) 『磐溪先生事略』五〇頁。引用文中の句読点は、嶋村による。
- (19) 鵜飼、前掲論文ならびに、大島、前掲書でも、「磐溪先生事略」および「磐翁年譜」を踏まえ、「獻欣微衷」を開国論として評価しているが、私見としては、本史料は、「鎖国」を維持するための海防強化、具体的にはイギリスからの交易要求を防ぐことを主眼とした海防論として読むべきであると考える。
- この「獻欣微衷」が提出された嘉永二年一〇月は、八月にイギリス軍艦マリナー号が浦賀、下田で測量するという事件があつた直後であり、前掲「磐翁年
- (20) 『幕末』三一一三。
- (21) 『幕末』三一一三の史料は、『日本思想大系 幕末政治論集』（吉田常吉校注、岩波書店、一九七六年）に、「大槻平次上申書（嘉永六年十月二十日）」として収録されており、「大通詞何某」については「和蘭大通事石橋助左衛門」と頭註にある。

譜 嘉永二年の頃に「閥老阿部侯ガ外防ノ論文ニ因リ」とあるように、阿部が求めたのは海防意見書である。のことからも、磐溪は海防論として『獻芹微衷』を執筆したと考えるべきであろう。

さらに内容的にも、「海堡篇」、「陸戰篇」、「水戰篇」と、これまでに他の識者によって著された海防論同様、台場の築造や戦闘法について論じており、開国論が主張されているという「隣好篇」も国防上の具体的な対応策の一つとして読むのが自然である。すなわち、「隣好篇」で磐溪が述べていることは、ロシアと同盟を結び、北辺の脅威を排除することで、イギリス使節が来航することが予測される西南方面に注力して、海防強化に努めるべきであるという、新たな安全保障体制の構築を提言したものと解釈すべきである。ロシアに対しても交易を許容すべきとしているが、これは交易を要求するイギリスを始めとする西洋諸国の要求をロシアににくいとめてもらう見返りとしてロシアにのみ認めようとするものであり、「鎖国」を放棄し、西洋諸国に対して積極的に開国すべしと述べているわけではない。したがって、開国論として位置づけることは困難である。

なお、オランダ、中国に加え新たにロシアへ交易を許可し、通商国を増やすことが、当時のいわゆる「鎖国」の放棄にあたらないとする磐溪の認識が何を根拠にしているのかは大変興味深い課題である。この課題は磐溪個人の对外認識にかかわる問題のみならず、当時の人々にとつて何を以て祖法として松平定信以降認識されるようになった「鎖国」が終わるのか、裏をかえせば、開国とはいかなる状態を指すのかという、開国史研究史上における大きな課題であるので、別稿であらためて検討することにしたい。

- (23) 『幕末』三一一三。
- (24) 当時東京の大槻家が所蔵していた著作書類は、現在、宮城県図書館大槻文庫、一関市博物館、国立国会図書館、早稲田大学図書館洋学文庫、静嘉堂文庫に所蔵されていることが確認できる。
- (25) 『幕末』一一一二。
- (26) 日蘭学会・法政蘭学研究会編『和蘭風説書集成』下巻（吉川弘文館、一九七七年）「嘉永五年 風説書」。
- (27) 風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』（青山学院大学総合研究叢書、吉川弘文館、一〇一九年）、第三二号一（長崎訳）・二（江戸訳）。
- (28) 磐渓が安政二年に編纂した『和米始末』に、「レビソン名日本紀 嘉永四年辛亥彼紀元千八百五十年」として収録されているのがこれである。なお、磐渓は「蝦夷の都府サンガル」について、「崇按ニサンガルハ津輕ナルベシ」と欄外で注記している。
- 『日本雑纂』については、沼田次郎「開国への一寄与——レフィスソーンの「日本雑纂」に就いて」（『日本歴史』通巻六三号）を参照。「開国起源」所収史料の他、東京大学史料編纂所所蔵史料に五件、鷹見泉石旧蔵書一件の存在を確認されている（五頁）。
- (29) 川澄哲夫編『中浜万次郎集成』（小学館、一九九〇年）二九七〇四六六頁。
- (30) この公文書ならびに、この文書に関するドンケル・クルティウスの補足説明書の和訳をあわせ、老中・阿部正弘は腹心の石川和助に『和蘭領東印度総督某贈長崎鎮台書翰和解／和蘭甲必答書和解』として筆写させており、現在、神奈川県立歴史博物館が所蔵している。
- (31) 前註同様、『咬噛吧都督職之者筆記和解／甲必丹差出候封書和解』として神奈川県立歴史博物館が所蔵している。
- (32) この経緯については、岩下、前掲書、九五頁に詳しい。
- (33) 「竹田鼎の日記」「中嶋宏子家所蔵資料」（中嶋宏子氏所蔵、横浜開港資料館寄託）。本史料については、西川武臣「史料紹介」日米和親条約締結時に記された林大学頭の従者の日記」（横浜開港資料館紀要）第三〇号において、解題
- (34) 『受取始末』の一部だけが記録された事例もある。水戸藩士・鈴木大は、別段風説書同様の対応をとるべきとする長崎奉行宛老中指令の部分のみ記録している（日本史籍協会篇『鈴木大雜集』）（日本史籍協会叢書一三〇、覆刻版、東京大学出版会、一九七二年）一八七〇一九四頁）。なお、収集経路ならびにその時期は不明である。
- (35) 宮城県図書館所蔵。登録資料名称は、『嘉永五年壬子六月和蘭告密書御請取始末附防微錄』（以下、「大槻本」）。本史料の、朱書きを含む主要部分については、「開国期・危機的状況下における知識人の情報活動と意志決定過程に関する研究」（平成三〇年度～令和二年度 科学研究費助成事業 学術研究助成基金 基盤研究（C）研究成果報告書、嶋村元宏編・著、二〇二一年）（以下、「科研費報告書」）において解題ならびに訳文を掲載している。
- (36) 「防微錄」と称する文書は、鹿児島県立図書館ならびに東京都立中央図書館近藤海事文庫にも所蔵されている。ただし、鹿児島県立図書館蔵書「野紙に大正一三年に写しなおしたものである。また、大槻磐渓がまとめた『米利幹書翰 八通』（静嘉堂文庫所蔵）の目次には、「●●●防微錄目次」とある。磐渓は「備忘錄」という意味で、「防微錄」と使っていたのであろうか。
- (37) 『有所不為齋雜錄』については、木部誠二「添川廉斎・有所不為齋雜錄の研究」（無窮会、一〇〇三年）を参照。これによれば、国立公文書館内閣文庫、茨城大學附属図書館、個人に所蔵されているが、残存状況はいずれも不完全である。なお、『有所不為齋雜記』に収録された朱書き入りの『受取始末』を分析した木部誠二氏は、朱書きの主を福山藩儒にして、老中・阿部正弘の君側御用掛として、各種情報収集活動や周旋を行っていた石川和助（関藤藤陰）であると推測し、石川が親交のあった添川廉斎へ提供したとしている（木部誠二「有所不為齋雜錄の史料による日本開国圧力——与力聞書とオランダ国王開国勅告史料」（汲古書院、一〇一三年）四一二～四一三頁）。しかし、前掲『科研費報告書』中の、「受取始末」解題（五〇～五三五頁）で指摘したように、朱書きされた内容を検討すると、石川が朱による書き込み等をおこなつたと考えることは難し

ならびに神谷大介氏の全文翻刻がなされている。

い。すなわち、受取可否の評議をおこなつた海防掛が西洋事情について無知であることを指摘しており、また、オランダ国王の開国勧告への対応については、「彼國の實意ヲ以御一大事を御忠告仕候義を、何故如此御咎メ被成候哉、更ニ合点不出来候」と、納得がいかない旨記述している。さらに嘉永五年にペリー来航が予告されていたにもかかわらず、何の対応もしなかつたことについて批判する等、自身の主君である阿部正弘がとつた一連の対外政策に否定的な立場をとつており、幕閣に近い者の記述とは思えない。そもそも、阿部に近侍していた石川は、註30・31で指摘したように『受取始末』に収録された一連の文書について接することもできたわけであり、後日関係文書をまとめ、幕政批判を含む朱書きを加えたうえで外部へ提供するというのはあまりにも不自然である。

但し、石川が添川へ朱書き入りの『受取始末』を提供したことについては、否定するものではない。岩下哲典氏は、自身が所蔵する『受取始末』（『和蘭告密御請取始末 全』）を紹介、分析されているが、その『受取始末』の「一丁目表には、「嘉永五年壬子六月 和蘭告密書御請取始末」とあって「阿部ら」と書かれて」おり、それが「海防掛・浦賀奉行・江戸湾防衛の四家（彦根・会津・川越・忍）、長崎防衛の佐賀・福岡藩、琉球を事実上支配した薩摩藩」へ回達されたことを明らかにしている（岩下哲典「徳川慶勝筆写の嘉永四・五年別段風説書と黒田斉溥の嘉永五年対外建白書」（前掲、「オランダ別段風説書集成」六〇四頁）。すなわち、朱書きされた状態の『受取始末』を阿部正弘が所持していたことが類推されることから、阿部のもとへもたらされた朱書きされた『受取始末』を入手し、外部へ提供したと考えることは可能である。

なお、阿部のもとへ朱書きされた『受取始末』がどのようにもたらされたのかという点は興味深い。朱書きされた『受取始末』に関しては、その成立や伝播状況等、多くの課題が残されている。

## (38) 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。

静嘉堂文庫所蔵。本史料は、磐渓の自筆本である。

静嘉堂文庫本の他に、東北大学附属図書館狩野文庫にも同名の史料がある。

但し、制作者について「堀達之助／志筑辰一郎訳」としているが、これは収録された最後の和訳文書の訳者を、本史料全体の制作者と誤解したからであると

思われる。「干時安政二卯年十二月写、岡下田湊図一枚別在／公暇亭主人」と奥書にあるように、安政二年二月に「公暇亭主人」なる者が、磐渓が編纂した『和米始末』を写したと考るべきである。なお、静嘉堂文庫所蔵『和米始末』には、「下田湊図」は添えられていない。

## (40) 「幕末」一一一二。

(41) 嶋村、前掲論文、参照。

## (42) 「幕末」七一一六一は同じ文書である。

## (43) 前註4。

## (44) 「幕末」一一一二。

(45) 同前。アメリカ船であると判明するのは、浦賀奉行与力・中島三郎助、同・香山英左衛門等が旗艦サスケハナ号へ乗り込み、蘭語通訳ボートマンから聞きだした同日中の「未中刻頃」のことである（『幕末』一、八九頁）が、磐渓が浦賀周辺で情報収集活動をおこなっていたと思われる六日頃までには、アメリカ船であると断定した情報は流布していなかつたようである。六月五日、代官斎藤嘉兵衛から勘定奉行へ宛てられた届でも、船籍不明であり、現地ではイギリス船ではないかと噂されていると報告がなされている（『幕末』一三九）。

なお、当時の状況と嘉永五年の「オランダ別段風説書」などの事前情報によつてペリー来航について知つていた者のなかには、吉田松陰の書翰を引用し、船であろうと推測した者もいたようである。岩下氏は吉田松陰の書翰を引用し、五日には「松蔭は、今回の船は「北アメリカ国」つまり現在の用語でいえばアメリカ合衆国の船に違いないと断定している」（岩下、前掲書、七頁）が、引用文を確認すると「船は北アメリカ国に相違無し、願筋は昨年よりの風聞の通りなるべし」とある。これは、異国船から出された要求が、「昨年よりの風聞」すわなち「嘉永五年來の噂」通りであることを根拠に、「北アメリカ国」に間違いあるまい、と推断したのであり、確實にアメリカ船であると断定してはいない。

## (46) 大槻磐渓『米夷紀事』国立国会図書館所蔵。

外題はもたないが、内題に「米夷紀事 大槻磐渓著」とある。また、関儀一郎・関義直共編『近世漢学者著述目録大成』東洋図書刊行会、一九四一年）に大槻磐渓の著作として書名がみられる（一一四頁）。

- (53) 本史料は「止至善塾藏」墨紙に整然とした字により記載されており、すべての収集活動を終え、後日まとめなおしたものと思われる。「止至善」とは、「大學」にある「止於至善」に由来するものと思われる。真理や善に到達した状態は、ともすれば揺れ動き、真理から外れた状態にすぐ戻ってしまうものであるから、真理であり善である状態にとどまる努力が必要という意味である。「止至善塾」については、磐溪の私塾と思われるが不詳。
- ペリー来航時の磐溪による探索行動は、藩命を受けての情報収集活動であり、藩への復命が本来求められるはずである。その意味で、『金海奇觀』は関係する图像をまとめた復命のための画巻と位置づけられる。従つて、文字による復命書もあわせて作成、提出されてしかるべきであるが、これまでそれに類する史料の存在は確認されていない。この『米夷紀事』が復命書であるとはその名称から考えて断定できないが、復命書を作成するうえで下敷きにする等なんらかの関係があると思われる。後考を俟ちたい。
- (47) 以下、本章における磐溪の行動については、とくに断りがない限り『米夷紀事』による。本史料については、前掲『科研費報告書』において概要を紹介しており、本章の記述はそれに多くを拠っている。また、『科研費報告書』で全文の訳文を掲載していることから、本稿では訳文の引用は極力抑えた。『科研費報告書』を参照されたい。
- (48) 『磐翁年譜』嘉永七年の項。
- (49) 関良基『日本を開国させた男、松平忠固』（作品社、二〇一〇年）三二一頁。
- (50) 写真4の書き込みには、「嘉永七年正月十七日余奉命赴浦賀」とある。しかしながら、『米夷紀事』では、一月二三日の藩命により二五日に江戸を発つてから金沢に到着したとの行動について、「扇屋トイヘル茶肆ノ前ナル昆比羅ノ丘ニ登リ、縮遠鏡ヲ出し、小柴・本牧ノ洋ニ掛けタル夷舶ヲ観ル方ニ五隻アリ、土人云七隻ノ内一艘ハ本牧ノ方ニアリ、一艘ハ昨日浦賀ニ至ルトイフ」と記述され、改行後、「廿七日、浦賀ニ至リ」云々とあることから、浦賀到着前の一月二七日にスケッチしたものと考えたい。
- (51) 『甲寅襍錄』嘉永六年、宮城県図書館所蔵。
- (52) 嶋村元宏「日米・日露和親条約における最恵国待遇について—「信義」と「公

平」—」（『品川歴史館紀要』第三〇号）参照。

(53) 二月九日の記述では、横手の素性は明らかにされていないが、一五日の記述に「塾生横手新太郎・駒藏一人、中津藩ノ士二伴テ横濱ニ行」とあることから、磐溪の塾生であることが判明する。

(54) 「嘉永七年二月二日付秀藏宛宮内彥太郎書翰」宮内敏氏所蔵。

この書翰に「又々一両日中大槻君と様子見届ケニ罷出可申候」とあり、かつ自身も、一月二五日から浦賀へ探索におもむき、詳細な異国船情報を得たこと、ならびに二月一日に江戸へ帰つたことが記されている。

なお、本史料ならびに註56の史料は、「WEB漬宅資料館」(<http://www.tcs-net.ne.jp/~hamataku/syokansyu.html#nikotarou>) で公開されている。一〇一二

(55) 『銚子市史』（国書刊行会、一九八一年）四五九頁。この時は、銚子の豪商田中年一月八日最終閲覧。

(56) 『嘉永七年二月二日付秀藏宛宮内彥太郎書翰』宮内敏氏所蔵。

一二日、一三日にアメリカ側が測量をおこなうこと、一五日に再びおこなわれる応接を見届けるつもりであることが記されている。

(57) 村上英俊については、富田仁『フランス語事始—村上英俊とその時代』（NHKブックス四四一、一九八三年）、同『村上英俊の仏学研究の意義』（文藝論叢八号）、田中貞夫『村上英俊『三語便覧』成立の一過程』（比較文学 第一四巻）、

『仏学始祖 村上英俊—佐久間山宿出身の洋学者』（大田原市那須与一伝承館、二〇一六年）のように、フランス学研究者として研究、紹介されている。しかしながら、いざれの先行研究においても、本稿で明らかにした英俊の活動については言及されていない。なお、村上がペリー来航時の探索についてまとめたものに、『棠蔭先生見聞記』（早稲田大学図書館）がある。本史料は、嘉永七年二月一五日から二六日までに収集した情報と、「蒸気車本名小火車格式連煤炭架連路」、「武州久羅岐郡横浜村應接場大略之図」、「應接場内平面図」の三図が記載されている。この史料もこれまで活用がされていなかつたものであり、稿を改めて、村上英俊のペリー来航時における情報収集活動について論じることとしたい。

- (58) 「船大将歎差大臣提督海軍統帥まつちうせべるり」木版墨摺、江戸時代末期、黒船館所蔵。
- (59) 高川文筌『横浜応接場米利堅銃隊布列図』紙本着色、江戸時代末期、真田宝物館所蔵。
- (60) 「馬甲剣」は、幕府側の記録では「騎兵軍刀」として記録されている。また、「Colt's Pistol 六響手銃」は、すでによく知られているように、コルト社製リボルバー式六発拳銃である。『金海奇觀』所収各図については、岩下、前掲解説書「五」一六頁参照。
- (61) アメリカが当時老中・阿部正弘へ贈った「アメリカ・メキシコ戦争図」は現在も阿部家が所蔵している。この史料の文脈では林へ贈られたもののように読めるが、他の複数の史料にも、林へ贈られたとするものはない。阿部へ贈られたものとの区別がつかないまま記載したのであろうか。
- (62) なお、二月二日頃までで記述が終わっている『米夷紀事』にはみられないが、前年嘉永六年に長崎でおこなったロシア・チャーチ使節の応接を終えた箕作阮甫が、二十四日に神奈川宿の鰻店辻村に投宿していた磐渓と交流をもつたことや、磐渓と箕作秋坪、宇田川興庵、ならびに磐渓が編んだ『金海奇觀』へペリーの肖像画などを提供した絵師・鍬形赤子など津山藩士との関係について、木村岩治編『箕作阮甫 西征紀行 幕末の日露外交』（津山洋学資料館友の会、一九九一年）をもとにした指摘がある（岩下、前掲解説書、三四頁）。

なお、本論文審査後、古河歴史博物館所蔵「鷹見泉石歴史資料」（国指定重要文化財）に含まれる、「米利幹人告牒」を調査した。これは、註28で紹介したとおり沼田次郎氏によりその存在が確認されていたものである。本史料は泉石自身により書き写されたものであるが、泉石が当初参考した原本で不明瞭な記述部分については、「右大槻磐渓之記録ニ依て朱を以補ふ物也」と末尾に朱書きしているように、大槻磐渓が所持していた『日本雑纂』をもとに書き改めたことを確認した。朱書き入りの『受取始末』同様、磐渓による『和米始末』あるいは、磐渓が入手したレフイズゾーンの『日本雑纂』がどのように流布したかについても改めて検討したい。

また、入稿後、「相州浦賀沖（アマツク）之異国船渡来一件」一冊（神戸大学附属図書館社会科学系図書館住田文庫所蔵）に、「受取始末」の一部であるペリー来航予告に関する、新任オランダ商館長ドンケル・クルティウスが長崎奉行へ伝えた追加情報の写が収められているのを確認した。これは、嘉永六年のペリー第一回来航時の状況を伝えるよく知られた文書について、冊子の最後に「甲必丹ヨリ長崎江差出候書付写」と表題が付されている。原文は嘉永五年九月にオランダ通詞西吉兵衛と森山栄之助によって訳されたものであるが、その写し本文の後ろに、「嘉永六年丑十一月写秋田」との記載がある。さらに、冊子自体の表紙には、「北／亞墨船渡來一件／牛田氏藏記」（／は、改行を示す。）、本扉に「嘉永六癸丑年六月二日ヨリ之変／相州浦賀沖江異國船渡來一件／牛田」とあることから、「秋田」が写したものと、嘉永六年一二月以降に「牛田」がペリー来航に関する文書類とともに、一冊にまとめたものと考えられる。「受取始末」の伝播に関する貴重な史料であり、これも活用し、「受取始末」の伝播過程についても分析をすすめることにしたい。

## 〔付記〕

本研究は、JSPS科研費JP一八K〇〇九五一「開国期・危機的状況下における知識人による情報活動と意志決定過程に関する研究」（研究代表者・嶋村元宏）ならびに、JSPS科研費JP一〇H〇一三一四「オランダ別段風説書の研究」（研究代表者・岩田みゆき）によつておこなつた。